

施設設計を考える3

文化芸術施設の今、これから

ひろば

連載:新型コロナが変えた仕事のスタイル 第2回

覗いてみました他人の流儀

海外レポート

各支部活動報告 北陸支部

未来へ継承したい風景

良質な建築、これからのまちづくり

連載:弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第3回

温故知新 活動報告

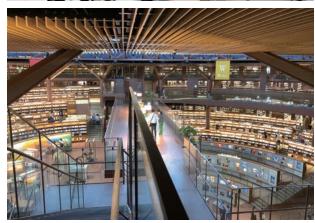
建築ウォームアップ

卒業設計をふりかえる

学生の会 @ joint 活動報告









レンガ組積壁で構造体を守り 建物の長寿命化に貢献する



株式会社東京ブリック社は、1992 (平成4)年に東京都板橋区で創業。建物のレンガ工事の提案から製造、施工までを行う、レンガメーカーであり施工会社です。施工するのはレンガ工事専門の職人たち。素材や積み方によって異なる工法も、長年培ってきた職人の技術で安全な壁につくり上げます。建物に合わせたレンガや納まりの提案から、耐震試験・構造計算、施工までをすべて請け負い、レンガ造の100年建築を目指して邁進しています。

小野達大社長(営業統括)と矢尾板宏学社長(工事統括)にレンガの魅力や工法ついてうかがいました。

レンガ専門の施工会社

当社はレンガ専門の施工会社として 今年で30周年を迎えました。会長の 粋塚高二が1992年に創業し、現在は 営業統括と工事統括の2人社長体制で 運営しています。

近年、建物の外壁はタイル張りが主流になり、レンガを積むこと自体が珍しくなってしまいました。しかし、SDGsの取り組みが広がる今、改めてレンガの魅力や機能を建築家の皆様に知っていただき、レンガ建築を身近なものとして根付かせていくことが当社の使命だと思っています。

二重壁にして環境負荷を抑える

レンガは耐久性と耐候性に優れ、建物の外側に積み上げることで長期間にわたり構造体を守ることができ、メンテナンスも必要ありません。また、レンガにより室温が保たれ、1年を通して快適な住空間を得ることができます。イニシャルコストはタイルより4割ほど上がりますが、ランニングコストを大きく抑えることが可能。レンガで構造を守ることは、図書館や博物館、美術館、学校など恒久的な施設や、住宅など木造建築にも有効で、仕上がりの温かさや重厚感もレンガならではです。

さらに、断熱材とレンガ壁のダブルスキンにすることで高断熱を実現できたり、最近よく見られるレンガの透かし積みも、意匠としてだけでなく、視線制御や日射抑制の効果があり、熱負荷を抑えて環境とコストの両面から建



「枚方市総合文化芸術センター」のホールの壁

物の維持・管理に貢献しています。

また、レンガは火に強く冷めにくいため、薪ストーブの周りなど、蓄熱性の少ない木造住宅等の部屋の一部に設置することで、火を消しても輻射熱で部屋を暖めることもできます。

建物に合わせた工法を提案

工法は大きく分けて4つあります。従来式の「湿式レンガ積み」はRC造などの構造体にレンガ壁を金物で固定するシステム。建物を外側から覆う外断熱レンガ積みの工法です。「乾式レンガスクリーン」はS造など変形の大きい構造や、大スパンや入り組んだデザインに対応し、レンガの間にゴムのパッキンを挟んで施工するため地震時の変位に追従します。「湿式レンガスクリーン」は従来のモルタルで固める方法にスライド機構を加えたもので、地震時は建

物は変形してもレンガ壁は建物からの 応力を受けない自立型のレンガスク リーンです。そのほかに上下両端で支持 する「レンガルーバー」もあり、建物ご とにマッチする工法をご提案しています。

レンガを積んで建物を守る

レンガは標準色の12色以外に、テクスチャーも含め特注にも対応しています。「枚方市総合文化芸術センター」では外壁と内部のホールの壁にもレンガを採用していただきました。この時は釉薬を施したレンガに初挑戦し、協力工場である榊原製陶所(愛知県西尾市)が新しいレンガづくりに一緒にチャレンジしてくれました。

これからも職人や協力してくれる工場と共に、化粧としてだけでなく、レンガを積むことで建物を守ることを伝え、実践していきます。

■ BRICKS 東京ブリック社

https://tokyobricksha.com

各種レンガの製造・施工、工法の開発を行う。レンガ自体や納まりの提案、図面作成にも対応。 本社/ショールーム・デザインルーム 東京都板橋区板橋2-40-3 渋川ビル TEL:03-5248-1751 埼玉事業所/工事部・業務管理部 埼玉県さいたま市中央区大戸1-15-20 TEL:048-762-9509

目次

●特集

4 施設設計を考える 🛭

文化芸術施設の今、これから

4 美術館 八戸市美術館が目指すもの/こと 日本大学 佐藤慎也

6 市民ホール/県立図書館 地域に開かれた文化芸術施設のあり方とその運営

―小田原三の丸ホールと石川県立図書館― 環境デザイン研究所 仙田 満

8 市立図書館 図書館を核としたまちづくり ―都城市立図書館― アイダアトリエ 会田友朗

10 地域活動拠点 エリアビジョンをまとう廃校活用を

一市民を巻き込みながら地域の活動拠点をつくる― ブルースタジオ 大島芳彦

● ひろば

12 連載: 新型コロナが変えた仕事のスタイル 第2回

テレワークから拡がる新たなプロジェクト管理術 スタジオネオ 伊波サチヨ

14 interview: 覗いてみました他人の流儀 有賀薫氏に聞く

これからの食卓のあり方を生活者の目線から提案する Bulletin編集WG

16 海外レポート シンガポールの都市計画に思う

18 **各支部活動報告** 北陸支部 次世代の建築家育成を通して地域会の活性化をはかる haws建築設計事務所 原田 学

金沢工業大学 竹内申一

創建築アトリエ 今井 均

大木賀惠

水野建築研究所 水野 敦

20 未来へ継承したい風景 遺構や建築が織りなす時代性 港地域会 22 良質な建築、これからのまちづくり 「子安の丘みんなの家」

―多世代交流拠点づくりでまちを楽しく魅力的に― 小山将史建築設計事務所 小山将史

23 連載: 弁護士から見た建築家 「トラブルを未然に防ぐ」 第3回 建築士の注意義務 山崎哲法律事務所 安藤 亮

24 温故知新 「旧江戸御府内最古の店蔵」保存再生計画 「店蔵」を解体してわかったこと

山岡嘉彌デザイン事務所 山岡嘉彌

25 抱負を語る 建築の仕事・これまでとこれから 内海彩建築設計事務所 内海 彩

抱負を語る デジタルファブリケーションと建築家の公共性 塚越宮下設計 塚越智之

26 活動報告 交流委員会 B グループ コロナ禍での活動をとおして QUALITY 保坂真美子

エフワンエヌ 向 利也

27 交流委員会 Dグループ 福岡の今 三越伊勢丹プロパティ・デザイン 市川匡亘

28 建築ウォームアップ 一建築のはじまりかたを探る一 設計に入らない「目線の提案」 久米設計 井上 宏

29 卒業設計をふりかえる 山手線上をリニアプラザで線状につなぐ 水上勝之建築研究室 水上勝之

30 **学生の会 @ joint 活動報告** 新たな交流による可能性 東京電機大学未来科学部建築学科 小山満大

● あとがき

31 ひといき ふるさと喜界島

タキロンマテックス 秋山隆典

31 編集後記

2 パートナーズアイ 株式会社東京ブリック社 レンガ組積壁で構造体を守り 建物の長寿命化に貢献する

表紙画像:上、「八戸市美術館」(設計 西澤徹夫建築事務所+PRINT AND BUILD+森純平)

下、「石川県立図書館」(設計 環境デザイン研究所)

〒 150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館 Tel: 03-3408-8291 (代) Fax: 03-3408-8294 https://www.iia-kanto.org/



文化芸術施設の今、これから

美術館

八戸市美術館が目指すもの/こと

日本大学理工学部建築学科教授 八戸市美術館館長 佐藤慎也



これからの美術館

八戸市美術館が新しい建築となって再開館してから1 年が過ぎました。1986年の開館以来、旧館では30年を 超える活動を行ってきており、さまざまな展覧会の開催 とともに、八戸ゆかりの作品を中心に約3,000点ものコ レクションを収集するに至りました。しかし時を経て、 美術表現の変化に対応した本格的な展示環境や、コレク ションを後世に引き継ぐための理想的な保管環境、さら に十分な耐震性能などの確保の必要性から、新たな建 築へと更新を図ることとなりました。また八戸市では、 「アートのまちづくり」が推進されており、「八戸ポータ ルミュージアムはっち」などの施設整備とともに、まち なかに活動を広げて地域を発見するアートプロジェクト が行われてきました。そして、これらのことを融合させ た新美術館整備基本構想が策定され、設計者選定のプロ ポーザルの結果、西澤徹夫・浅子佳英・森純平の3氏が 選ばれ、昨年11月に再開館を迎えました。

このような経緯でつくられたことから、八戸市美術館 は、これまでの美術館とは少し変わった点があるのかも しれません。もちろん、美術館の基本的な役割である、 収集、保管、展示、調査研究、教育普及といった活動を 行っていくことはもちろんですが、現代における美術の あり方を踏まえた上で、八戸ならではの、これからの美 術館をつくり出そうとしています。

八戸市美術館は、アートを通した出会いが人を育み、 人の成長がまちを創る「出会いと学びの美術館」をコン セプトとしています。従来の「もの」としての美術品展 示が中心だった美術館とは異なり、「ひと」が活動する空 間を大きく確保することで、「もの」や「こと」を生み出 す新しいかたちの美術館がつくられ、八戸市の新たな文 化創造と活性化を図ることを目指しています。そして、 従来の立場や枠組みを超えて、アートと「ひと」との出 会いの輪が広がり、そこから得た学びが栄養となって 人々の感性や想像力が育まれ、まちや暮らしをより豊か

なものにすることを期待しています。

ここで「美術」を「アート」と呼び替えている理由は、 これまでの美術が指していた絵画や写真、書といった「も の(物体、物質)」だけに留まらず、アートがもともと「技」 という語源(ラテン語のアルス)を持つことから、人の 手によって生み出されたさまざまな「こと(出来事、関 係)」までを、アートは含むと考えられるからです。こ の美術館では、そんな「技(アート)」を媒介として、「ひと」 と「もの」と「こと」が、出会い、学びあう、そんな場を 生み出していきたいと考えています。

展覧会とプロジェクトのための場

そこで八戸市美術館では、「展覧会」と「プロジェクト」 という2つの柱を事業の中心に据えています。「展覧会」 は、誰もが気軽にさまざまなアートに触れられる機会を 提供するものです。一方の「プロジェクト」では、アー トを通して人と人が出会い、学び、一緒に活動し、作品 だけでなく新たな価値を生み出していきます。市民や アーティスト、専門家、美術館スタッフなどが同じ場で 学び、共につくることで、完成形だけでなくプロセスを も共有することが特徴です。そこで新しい美術館の建 築では、「展覧会」に対しては、本格的な展示環境を確保



ジャイアントルーム

(撮影:阿野太一)

する個性を持った展示 室などの個室群を用意 している一方で、「プロ ジェクト」に対しては、 さまざまな活動を受け 入れる「ひと」のため の巨大な空間「ジャイ アントルーム」を用意 しています。ジャイア ントルームは、可動式 の家具やカーテンによ り、プロジェクトを展



展覧会 「持続するモノガタリ」

開するためのさまざまな場をつくり出すことができ、これからの美術館を象徴する空間であると考えています。

再開館以来、いくつかの「展覧会」を開催してきました。 なかでも、厳選した美術館のコレクションを紹介する展 覧会「持続するモノガタリ」では、八戸に暮らした人た ちによる作品や、八戸の風景が描かれた作品によって構 成されるコレクションを紹介するにあたり、来場者が静 かに鑑賞するだけでなく、コレクションを媒介とした対 話が生まれることを目指しました。そのために、美術品 を並べるだけでなく、コレクションに関わる人たちにイ ンタビューを行い、その映像をあわせて展示しています。 そのインタビューでは、美術品をめぐる出来事が、アー ティスト自身やアーティストを知る人たちによって語ら れていきます。常に誰かの声が聴こえてくる展示室とす ることで、静寂とともに美術品と向き合う緊張感よりも、 美術品をきっかけに思考が広がる居心地のよさをつくり 出そうとしました。さらに、展示室内の監視を行う人た ち(この美術館では「案内員」と呼んでいます)にも、来 場者の邪魔にならないように作品を案内する役割を担わ せたり、展示室の最後には、この展覧会を構成した担当 学芸員の部屋をつくり、そこでは来場者とコレクション をめぐる深い対話が交わされました。ひとりで美術品に 浸りたい来場者にとっては、なんともお節介な美術館な のかもしれません。しかしこの美術館では、「ひと」と「も の」と「こと」の出会いと学びという考え方を実現するた めに、さまざまな展覧会のあり方を模索しています。

そして、「プロジェクト」においても、さまざまな出来事や関係が生まれています。これまで行われてきたプロジェクトでは、募集したメンバー(プロジェクトに参加する市民を「アートファーマー」と呼んでいます)により、アーティストとともに出演者となってパフォーマンスを行ったり、来場者に美術館を紹介する建築ツアーのガイドを担当したり、さまざまなアートをめぐる活動を行っています。

「ジャイアント食堂」という上演

今年の6月に、この美術館ならではのプロジェクトとなった「ジャイアント食堂」を開催しました。ジャイアントルームは、誰でも自由に使える広場のような場所であり、持ち込んで飲食を行うこともできる場所です。そ



プロジェクト「ジャイアント食堂

の飲食ができるという特徴をさらに拡張して、1日限りの食堂をジャイアントルームにつくり出す、というプロジェクトを構想しました。美術館前の広場にキッチンカーが並び、そこでさまざまな飲食物が販売され、ジャイアントルーム内では、絵画展示、音楽ライブ、ダンス、カンフー演武、カラオケ、ビンゴ大会、ワークショップ、建築ツアーなどの出来事が次々に繰り広げられました。どうしてそんなことを美術館で開催したのか? これらは、はたしてアートなのか?

「ジャイアント食堂」は、もちろんアーティストたち(パ フォーマンスプロジェクトの居間 theaterと音楽家の大 谷能生)によって企画された作品です。ジャイアントルー ムを「食堂」と見立て、さまざまな出来事を用意したこ とは、すべて、この美術館へ多くの市民を呼び込むため の仕掛けでした。先ほどアートは「技」であると述べま したが、この状況をつくり出すために、その1日の流れ がひとつの戯曲として書かれ、その戯曲を市民も巻き 込んで上演したものが「ジャイアント食堂」であり、そ こにはアーティストたちの「技」が不可欠だったのです。 おかげさまで、美術館が1日限りの食堂となった上演に は、大勢のみなさんが来場してくれました。食べて、飲 んで、話して、歌って、つくって、鑑賞して……。それ もみんな、この美術館ではさまざまなふるまい方ができ ることを示すためのものでした。はじめてこの美術館を 訪れた人たちも多かったと思いますが、自分たちのまち にある美術館が、みなさんの居場所として存在している ことを知る機会になったのではないでしょうか。

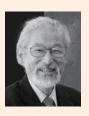
「ジャイアント食堂」を終えてから、少しだけ、美術館の空気が変わったように思います。大勢の来場者を迎えた自信による美術館スタッフの変化はもちろんのこと、訪れるみなさんが、この美術館でのふるまい方を身に付けはじめてきたようです。まさに「ジャイアント食堂」というプロジェクトと「出会い」、「学び」が起きたためなのではないでしょうか。ぜひ、これからも、多くの市民のみなさんに、自分たちの美術館として、八戸市美術館をさまざまに使い倒してくれることを期待しています。

市民ホール/県立図書館

地域に開かれた 文化芸術施設のあり方とその運営

―小田原三の丸ホールと石川県立図書館―

環境デザイン研究所 仙田 満



公共施設は税金でつくられる

こどもの成育環境の研究とデザインを中心にさまざま な分野の仕事をしてきた。若い頃はこどもの国、児童館 の仕事が多かったが、1980年代科学館、1990年代博物館、 スポーツ施設、2000年代学校施設、こども園、2010年代 劇場、図書館、庁舎と変化してきている。ここ15年間の 代表的仕事は「新広島市民球場」「国際教養大学中嶋記念 図書館」「軽井沢風越学園」「小田原三の丸ホール」「石川 県立図書館」だ。近年、筆者は「困難を乗り越える力を 育む環境デザイン」を共通項として、設計にあたってきた。

2009年に完成し、オープンした「新広島市民球場」が 最も地域に対する貢献度が高い施設だと思われる。3万 人収容の野球場の建設費は一般的に1席当たり50万円 かかるとされてきたものを30万円で実現した。幅10m、 長さ200mのアプローチスロープや新幹線からのぞける 構成等により多様な人々が来場可能な開放的な施設づく りをした。このため、来場者が増加、指定管理者となっ たカープ球団は新たな投資が可能となり、さらにファン が増え、球団が強くなり、地域が大変盛り上がり、駅周 辺の再開発も進んだ。地元シンクタンクによれば、年間 200億円の経済波及効果があったとされている。

従来、建築計画学に、より多くの人々が利用するため にはどうしたらよいかというテーマはあまり議論されて こなかった。しかし、公共施設は税金によってつくられ



新広島市民球場

る。市民に多く利用されるために は、建築計画的にどうあらねばな らないかを学術的にも研究される

べきであると考える。

集客性は重要だ

筆者は大学卒業後、就職した菊竹清訓建築設計事務所 にて「こどもの国 林間学校」を担当した。こどもの国も 有料施設である。100haで100万人の集客が目指されてい た。施設空間の管理のためにも、また税金の有効な使わ れ方という視点においても、利用者数というのはその施 設の評価として重要ではないかと思われる。我が国は財 政的にかなり危機的な状況にある。文化施設であっても、 できればメンテナンスコストを自立的にまかなえる方向 が望ましい。そういう点から公園もPark-PFIという形で の、自立的な建設運営手法が多くとられようとしてきて いる。筆者の経験によれば、例えばスポーツ施設の場合、 行政が建築のプログラムをつくった場合と、運営のプロ である民間運営会社が入った場合を比べると、建設コス トは3~4割減、運営は料金体制にもよるが大幅減になっ た事例もある。将来的にスポーツ施設はよりPFIによる 建設が進んでいくであろうと予想される。文化施設の場 合、そもそもスポーツ施設よりも難しい点が多い。図書 館等は無料が原則である。だからこそ、その利用率の高さ、 入場者数の多さが評価されるべきと考える。

しかしながら博物館のように、建築空間が、その集客 性に寄与できるのは3割程度と思われる。やはり展示の魅 力、イベントの魅力も大きい。もちろん立地も大きく左 右する。近年のプロポーザルではLCCの最小化のアイディ アは求められるのだが、これは片手落ちだと考える。極 端にいえば、入場者、利用者が少ない方が、メンテナン スコストはかからないので、LCCが最小となる。多くの 利用者を集めようという動機づけにならない。利用者1人 当たりのLCCの最小化こそ競うべきである。それなのに、 プロポーザルにおいて、利用者を多くするためのアイディ アを求める課題に出会ったことがない。建築家も集客性 について運営者に任せるのではなく、空間構成者として アイディアを磨き、発信していく必要があると思われる。

今回の『Bulletin』のテーマに対して、2019年完成の「小 田原三の丸ホール」と、2022年完成の「石川県立図書館」 にしぼって、地域に開かれた文化芸術施設のあり方につ いて述べてみたい。

厳しい予算と高品質

「小田原三の丸ホール」はデザインビルドによって選 定された。過去2回のコンペによって設計者が決められ てきたが、市長交代、工事費高騰などの理由により、2 回振り出しに戻り、2016年に設計施工一括型のコンペが 行われた。工事費は税金によって賄われる。そういう意 味では建築家は工事費をできるだけ抑え、そして高品質





(撮影:株式会社エスエス 島尾望)

なものをつくる義務があると思われる。もちろん裕福な クライアントであれば、それなりに高価なものをつくる ことができる。しかし、今の我が国の財政事情を考える 時に、建築家として、工事費について十分に関心と責任 をもたねばならないのではないかと思える。もちろん不 当に安い予算設定については異議を申し立てねばならな いが、厳しい予算をアイディアとデザイン力でカバーす ることが求められていると思われる。

まちづくりへの貢献

この「三の丸ホール」では、地域にどう開き、貢献す るかという問いに対しての私たちのアイディアは、敷地 の東西に走るお堀端通りと国道一号線を結ぶ直線的な道 路を設けたことである。商業施設と観光業的施設をにぎ わい廊として、劇場本体と東西通路を境にそれぞれ分棟 して、それを予算内で実現する方法を提案した。劇場 部分は大ホールと小ホールを東西に分け、それをギャラ リー回廊という形式でつなぎ、サービス部分を創造回廊 として設けた。この方法はこの狭い敷地の中でかなり限 界まで展開された。1階のお城側に展示ロビー、2、3階 はお城を望む絶景ポイントを形成している。ここを訪れ る人々はそのお城の景観に驚きの声を上げる。一方で、 示された予算内にきっちりと収めることができた。設計 者として東西道路を設けることにより、小田原市の観光 客の流れを変え、市民にとってのアクセスの多様性を保 証するような仕掛けを意図している。今後、さらに市は 旧市民会館の再開発を予定している。それと合わせた新 たな回遊性が生まれることを期待している。

困難を乗り越える力を育む場

「石川県立図書館」は2017年にコンペが行われ、幸運に も設計者として指名された。金沢市の文化教育ゾーンで ある旧金沢大学工学部跡地が2分され、県による図書館と、 市による金沢美術工芸大学が建設されることとなった。

筆者の提案は、配置から建築計画に至るまで、遊環構 造を素直に適用することであった。アプローチ道路側 である南側に広場を設け、駐車場と緑地を周辺に配置し、 周囲の住宅街に十分に配慮する計画とした。本図書館の 基本構想によると、課題解決型の図書館として、従来の 地域図書館の本館的な役割だけでなく、工芸文化県とい



石川県立図書館

うブランド力の向上を明確に示す図書館が目指された。 筆者はそれを「困難を乗り越える力を育む場としての図 書館」と読み替え、1982年より仮説をたてた「意欲を喚 起する空間の構造」である遊環構造の応用を考えた。す でに遊環構造は2010年頃より、新たなモデル図を形成し、 グレートホールが本図書館の中心的なめまい空間として、 構成される形となった。これは秋田の「国際教養大学中 嶋記念図書館」の進化形である。

創造には集中とワンダリングが必要だ

この図書館は開館後1ヵ月間、毎日5.000人もの人が 利用している。開館から間もないこともあるが、そこで は従来の図書館になかったコミュニティ施設としての広 場が用意されている点も寄与している。小さな学会の開 催も可能なマイス機能をもっており、博物館的な要素も あり、発表もできる。また交流もできる要素を前面の広 場にもっており、大扉を開放することによって、マルシェ も内外一体となって展開できるようになっている。

ここでの設計者としての提案の重要な点は、3層全体 をスロープで回遊できる点である。グレートホールと呼 ぶ円形劇場的空間は、階段、エスカレーターだけでな く、1/20のスロープで回遊し、さまざまな領域の本を探 し求めることができる。このグレートホールは7万冊の 本が1度に視野に入り、また世界中のすぐれたデザイン の椅子たちと、プロダクトデザイナー川上元美氏のデザ インの椅子が配置されている。創造には集中とワンダリ ングが必要だと考えている。その両者をこの空間に実現 することが意図されている。地域に開かれ、今後もさま ざまな活用が試みられることが期待されている。筆者が 意図した、楽しい時も悲しい時も、困難に出会った時も、 喜びの時も、このグレートホールの円形のスロープをめ ぐることによって、多くの人々が心を整え、生きていく 意味をとらえ直し、元気に毎日を過ごすことを後押しで きれば素晴らしいと思える。

市立図書館

図書館を核としたまちづくり

一都城市立図書館—





地域に開かれた、人々の居場所、情報発信の拠点として図書館をまちづくりの中心に据えた例が増えている。人口約16万人を数える宮崎県都城市の中心市街地に位置する都城市立図書館は、鉄骨造3階建ての延面積約9,200 m²の商業施設を改修し転用、2018年4月にオープンした。今年9月16日には来館者が400万人を突破、開館から4年あまり、多くの市民の居場所として親しまれている。

館のパンフレットに運営者による以下のようなテキストがある。「ひとりひとりが自ら『だいじなもの』を見つけていく活動、表現していく活動~これが、日々の暮らしをいきいきとさせ、地域の文化や生業、まち、風土といったものの継承や発展、より独創的な創造につながる。そのための、私たちの図書館。」 ここに「本」「資料」はもとより「情報」といった単語も含まれていないことにお気づきだろうか。

リノベーションを含めた中心市街地の再生

プロジェクトの背景を整理しよう。市の中心市街地の歩行者数は、1985年から1994年の10年間で1/20まで落ち込んだという。その後長引く景気後退のなか2011年に「都城大丸センターモール」が突如廃業、1.2haの広大な土地と既存建物が街の中心に残された。この事態を受け、市は、商工会議所や第三セクターの「ハートシティ都城」と連携して中心市街地の再生計画を進め、図書館や子育で支援施設など計8施設で構成する中核施設を整備することを決定、中核施設を「Mallmall」と名付けた。これは、図書館をはじめとする8つの公共施設で、うち3施設は既存ストック(旧ショッピングモールと立体駐車場)をリノベーションして整備したものである。改修の

設計者は公募型プロポーザルで選定された、地元の益田 設計事務所を代表とするJVである。図書館の管理運営業 務や備品調達等の業務を担う事業者は別途公募され、筆 者は、MALコンソーシアム(代表企業マナビノタネ)の 協力者として図書館の空間デザイン総合監修に携わった。

プログラムと空間意匠の一体性

高機能な建物や空間を用意しても、適切な運営が行わ れない限り公共施設の役目を果たしているとは言えな い。一方、設計者にとって、運営のあり方(ソフト=プ ログラム) が読めない段階での建築 (ハード=空間) の設 計には常に困難がつきまとう。特に、昨今、多種多様 な居場所や活動の機会を提供する場へと変貌しつつある 図書館というビルディングタイプを考えるとき、この設 計与件にまつわるソフトとハードの表裏一体性は見逃せ ない。その点、本プロジェクトにおいて、デザイン監修 を担う建築家として、建築改修工事にはVEという観点 から内装材や色調の提案、照明をはじめとする各種設備 の意匠選定に関わる一方、運営者とともに家具什器備品 のレイアウトやデザイン、選定を行うことができたのは 幸運だった。施設として目指すべき場のあり方、使われ 方を、行政の担当部局や運営者と具体的に議論しながら、 プログラムとそれに見合った空間意匠を同時並行で検討 することができたからだ。

家具什器でつくるインテリア・ランドスケープ

ところで、図書館建築の特徴として家具什器の類の果たす役割の大きさが挙げられよう。その意味で図書館はリノベーションやコンバージョンと馴染みが良い。書架







ショッピングモールの名残を感じるストリート カフェから図書館内を望む。図書資料より活動が前面に見える 館内中央のホール。居場所や活動を見通す

館内中央のホール。居場所や活動を見通すことができる (撮影:野秋達也)

・ 家具や什器でつくるバラエティに富む [居場所] ・ ① つみ木ばこ ② カフェ ③ オール ④ インデックス [さくいん] ・ ③ 決対 CLTを活用した展示台 ⑥ プレビュースタジオ ⑦ ショーケース ⑥ マガジンウォール

① つみ木ばこ メインストリートの両側には、地元家具工業会と開発した「つみ木ばこ」と命名した組替え可能な書架を配し、日々変化する「店先」としての顔をつくった。その背後に側板のみ杉突板でアレンジした一般的なスチール書架が並び、その奥に壁や窓に沿って落ち着いた閲覧席が並ぶ。② カフェ 飲食の場にとどまらず、「市庭」という運営コンセプトを掲げ、連携して市内産業の6次化を目指す場。

③ホール ショッピングモールの名残を残す、天空光の降り注ぐアトリウム。講演や演奏、ワークショップ等の活動も行われる。

④インデックス [さくいん] 随時更新されるキーワードを二次元バーコードスタンプ化して並べる棚。小宇宙としての図書館が、手触りのある極小のオブジェクトに凝縮して象徴的に表現されている。

⑤残材 CLTを活用した展示台 無造作に積み上げたようでさまざまな展示スペースを用意し、企画者や観覧者の発見・対話を促すデザインを目指した。 ⑥プレビュースタジオ 「コの字」平面で映像や展示の様子が見えるスタジオ。木毛セメント板で吸音に配慮し、外部はパンチングメタルと掲示ボードでフレキシブルな展示替えに対応するパヴィリオン。

①ショーケース 杉角材と強化ガラスによるパヴィリオン。購入前の図書(見計らい本)を展示するための場所。その他、市美術館と連携した企画展等も開催。 ⑧マガジンウォール 160タイトルの雑誌を壁面に並べた書架をデザイン。バックナンバーはすぐ下に積み、取り出しやすい工夫をした。

⑨対面朗読・録音スタジオ 情報の音声化やコンテンツ制作に伴う録音・編集作業を行う部屋として整備。ボッドキャストの配信等も行っている。⑩ブロジェクトスタジオ 市民による市民のための活動を行う部屋。出入り自由の展覧会なども行われ、参加者が展示を更新していくことも。⑪ティーンズスタジオ/ Fashion Lab. ガラス張りの工房スペース。大容量シンクを備え、染物やプリント、ものづくり、撮影に対応している。

⑩まちなか広場 右奥が図書館、左手はホテルやスーパーマーケットが入る複合施設。マルシェなどのイベントが開かれる界隈の中心となる広場。

をはじめとした家具什器の並びで空間をつくれるからだ (図書資料は重いので耐荷重条件をクリアするという課題はある)。本プロジェクトは、吹き抜けを中心にテナント店舗が並ぶショッピングモールの空間構成を、図書館に「見立て」ることから始まった。人々が内部を歩きながら散策して本や情報、人や活動に出会う「歩いて楽しいストリート」を空間のコンセプトとした。大空間を生かして壁はなるべくつくらず、パヴィリオンと呼ぶ大きな家具、書架や大小の什器のレイアウトの工夫で館内に多種多様な居場所(座席数は500席以上)を創出することを目指した。詳しくは写真と囲み内のテキストを参照してほしい。

人と情報、活動がつながったまちづくりへの波及

今春、図書館内のギャラリーにて「都城まちなか記憶展」が開催された。中心市街地のかつての賑わいを写真や地図、図書館員制作の模型などで紹介したところ市民から「自宅にこんな資料がある」と続々と情報が集まり、プロジェクトスタジオでの立ち入り自由の展示へと展

開、市民からの日々のコメントが付箋に貼られ、情報が蓄積されている。情報の収集・整理、編集・発信をしていくスキルをもった人材がいる図書館をハブとしたまちづくり活動への展開の可能性を感じる出来事である。また、今年4月には街区内隣地にホテルや飲食施設などを備えた民間複合施設がオープンした。宿泊者はルームキーで市立図書館の本を借りることができ、本はホテルのチェックアウト時にフロントで返却可能だ。公立図書館として全国初の試みであり、DX技術も積極的に取り入れながら公民連携が推進されている。

冒頭の問いに戻ろう。言うまでもなく資料は図書館の重要な一部であり、都城市立図書館も所蔵資料は38万冊(うち開架17万冊)で、収容能力には将来への余力も持たせている。ただ、運営者の考えはこうだ。「〈知〉は現場にある。資料はそこへ出向くときのインデックス(見出し)として必要なのだ」と。豊富な資料や司書・スタッフの力を借りながら、地域の歴史風土に根差し自律した市民活動が育まれていく場は、次代の図書館のすがたのひとつと言えるだろう。

地域活動拠点

エリアビジョンをまとう廃校活用を

一市民を巻き込みながら地域の活動拠点をつくる―





全国の廃校の状況

少子化、人口減少などの影響で廃校になる公立学校 の数は今や年間平均約450校(平成14年度~令和2年 度)、その累計は令和3年度時点全国で8,580校にのぼっ ている。多くの敷地、建物は社会体育施設、社会教育施 設、福祉施設、医療施設などの公的施設としての活用が されているが、民間主導による地域性を生かした多種多 様な活用の事例も近年増加し、公民連携による地方創生 の呼び声の中、周辺地域の活性化に寄与する個性的な事 例も多く見られるようになってきている。それぞれ廃校 に至った原因は大きく3つの地域課題に分類され、過疎 化によるもの、都市化によるもの、そして高齢化による ものだ。活用策は当然それらの地域課題によって異なり、 自然環境の豊かな過疎化地域では体験交流や宿泊のため の施設、都市化が進み居住者が減った中心市街地ではイ ンキュベーション機能を持つワークスペースなど、そし て高齢化した地域では老人福祉施設や社会教育施設など への転用が多く見られる。

多様な活用例が増える一方で、廃校のうち20%近くは活用策が定まらないまま放置され、その維持管理費が自治体の大きな負担となっており、文部科学省では平成22年から「みんなの廃校プロジェクト」を立ち上げて全国の廃校情報を集約、発信し、廃校活用のマッチングイベントの開催など廃校活用の推進を図っている。

廃校活用のポイント

さまざまな事例が増え、今後さらに廃校の増加が予測される状況の中、地域活性と合わせた廃校活用を目指すためのいくつかのポイントが見えてきているのではないだろうか。ことに運営上のポイントは以下の3つと考えられる。

●地域社会のよりどころ(小中学校)

公立小中学校は義務教育課程であるがゆえ、多くの地域住民にとって共通のアイデンティティーが宿る場所といえる。ことに小学校は明治初期の尋常小学校時代から140年近い歴史を持つ学校が多く、街中における立地条件も非常に良くモニュメンタルな場所であり地域社会のコミットメントを促しやすい。

●家守としてのマネジメント会社の必要性

学校の敷地建物は実際には非常に大きく、これを活用するにあたって「単一の機能・用途」では通常使いこなしきれるものではない。学校を都市の中の1つの「エリア」であると考え、これをマネジメントするための家守会社(エリアマネジメント会社)を立てることにより多機能で活動的な運用が可能となる。

●中長期的なエリアビジョン

学校区の中の唯一の存在であった小中学校。学校区は 地域社会のアイデンティティーを形成する1つの単位で あり地域(エリア)に対する帰属意識の源である。廃校 となった後も土地建物は公的不動産である以上、そのエ リアの近未来を予測させるビジョンをまとう場所である べきであり、それが可能な場所である。

「ユクサおおすみ海の学校」の場合

鹿児島県大隅半島、錦江湾に面して建つ旧鹿屋市立菅原小学校は120年の歴史をもち2013年に廃校となった小学校で、当プロジェクトは過疎化による廃校を活用したモデル。「ユクサおおすみ海の学校」は2018年7月、小学校の敷地建物を活用し、体験滞在型の宿泊施設を中心とした複合施設として開業。コンセプトは「おおすみ半島の人と自然が先生です」、運営は株式会社ブルースタジオをスポンサーとする現地法人「株式会社カタスッデ」、鹿屋市のまちづくり会社「大隅家守舎」代表でもある川畠康文が代表をつとめる。小学校としての出立ちを極力残しながら宿泊施設に用途変更をし、合宿なども含めて最大約100名の中長期滞在の受け入れが可能となっている。滞在者は地域の人々が主体的にコミットしながら(先生となって)提供する鹿屋・大隅半島ならではの



「ユクサおおすみ海の学校」。 海と山に囲まれた自然 豊かなロケーション

校庭ではテントを設 置してキャンプを行 ー うことができる







地域の農家による軽トラ市

地域の食材を活かした食堂「さのぼい」

海山の体験をすることが可能である。

宿泊施設以外には地域の食材を活かした食堂(さのぼ い)、コワーキングスペース (Oddo)、体験工房 (Suddo)、 鹿屋体育大学自転車部とも連携したプロサイクルショッ プ(FunRide 鹿屋店)、直下のビーチをベースとするカヤッ クスクール (Paddlers)、整体院 (あんどう整体院)、カカ オ豆からオリジナルチョコレートを製造販売するショッ プ(kiitos)が出店している。さらには、グランドで不定 期に開催される地域の農家による軽トラ市や隣接漁港の 漁業協同組合による海釣りツアー、さらには地域住民が 教室を利用して開催するさまざまなカルチャースクール など、ユクサの環境を活かした地域の人々の活動が活発 である。また運営会社カタスッデは地域の自治会ととも に施設の地域防災拠点(避難所)としての運営を行い体育 館やグランド利用の窓口の役割も果たしている。

開業以来意識しながら5年目を迎えて「ユクサおおすみ 海の学校」で実現しつつある状況。それが先の3つのポ イントなのだ。ここで株式会社カタスッデは宿泊施設運 営会社という立場を超えてむしろ旧菅原小学校の土地建 物を地域社会と市民を継続的に巻き込みながら運営する 家守会社(エリアマネジメント会社)として機能している。 それを育んできたのは「おおすみ半島の人と自然が先生 です」という周辺地域の人々を主役と考えるビジョンと、 120年の歴史と地域にとっての象徴的な立地ゆえの愛校 心やアイデンティティーに支えられてきたといえる。

「いくのコーライブスパーク(いくのパーク)」の場合

大阪市生野区の旧御幸森小学校は通称大阪コリアタ ウンに隣接する2019年に廃校となった100年の歴史の ある小学校。こちらは都市化による廃校の活用事例だ。 大阪市生野区は日本で最も外国籍の住人の多い土地柄。 御幸森小学校も大阪市で初めてのユネスコスクールと して「多文化共生教育」に励んできた校風があった。こ こが2022年秋に「いくのコーライブズパーク(通称いく のパーク)」としてリスタートした。運営会社は大阪を 拠点とし"食を通じたまちづくり"を標榜し数多くの飲

食店経営のみならず飲食従事者の育成や地域食材の流 通なども手がける「株式会社 RETOWN」と、地域で"多 文化共生のまちづくり"を目指す「NPO法人 IKUNO・ 多文化ふらっと」の共同事業体が担う。旧御幸森小学 校区エリアに定めたビジョンは「共生の心を持つ全国 No.1のグローバルタウン」だ。

コー(CO)『ともに』生きていくこと、ライブズ(LIVES) 尊厳を持つ『人』であること、パーク(PARK)開かれた『場 所』であること、を目指している。

生野区の御幸森小学校区はコリアタウンの韓国・朝鮮 の食文化の集積のみならずアジアを中心とする世界の食 文化が集うエリアで、当プロジェクトはその立地特性を 十二分に活かしたもの。校庭を緑豊かな公園(パーク) のような場とし、これを中心にサービス業のインキュ ベーション機能を担う「飲食人大学」、シェアキッチン・ キッチンカーの拠点施設の運営、市民菜園、子育てをサ ポートする図書館、子ども食堂の運営、外国ルーツの子 供たちと家族の支援など多岐にわたる。一気に全体の開 業を目指さず、2022年秋から順次校内を整備し共感の環 を広げながらビジョンを育んでいく予定だ。

この2つの事例はどちらも、廃校の活用手段を単機能 とせず、パブリックマインドのある運営会社が周辺エリ アも含めた独自の施設ビジョンを設定した上で、地域住 民の当事者性、コミットメントを巻き込みながら複合的 な用途を持つ施設として運営していくモデルだ。公共や 限定的な個社(事業者)にリスクと経済的負担を強いる ことなく廃校を活用し、地域を巻き込みながらしなやか に事業と地域を活性化していくこれらのモデルはこれか らの廃校活用、遊休公共空間活用のスタンダードなスタ イルとして、全国の過疎化地域、高齢化地域においても 普及していくことを期待したい。



図書室「ふくろ うの森し





木がふんだんに使用された図書室は親子で利用できる

テレワークから拡がる 新たなプロジェクト管理術

デジタルツールが実現する業務の「見える化」



個人協力会員 スタジオネオ 伊波サチヨ

ウェブ制作やグラフィックデザインを行うスタジオネ オでは、テレワークが生産性においても大きな成果があ ることが実証され、スタッフの自由な働き方の選択肢の ひとつとして今もなお継続しています。3年目を迎えた 今、テレワークを実現する中で出会ったデジタルツール を活用し、皆が幸せになれるための新たな働き方と、効 果的な会社経営の手法をデザインしています。

進行管理を見える化するTrello

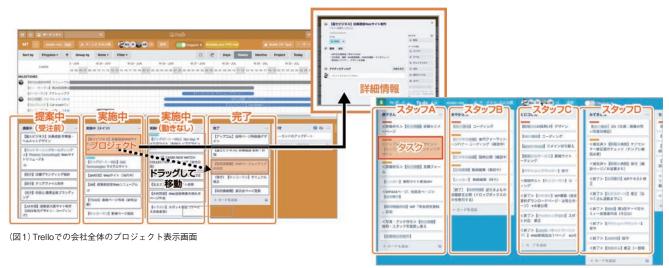
チームで1つのモノを作り上げていくには、テレワー クか否かを問わずコミュニケーションが重要な要素とな りますが、テレワーク環境下においてもデジタルツール を使い生産性を上げることのできる私たちの仕事術を夏 号ではご紹介しました。完成イメージを共有し、それに 向けて共同作業をしていく分には、インターネットがつ ながっていれば難しいことではありません。しかし管理 者にとって、スタッフの仕事ぶりが目の前で見られない ことは、仕事の割り振りを瞬時に判断することが難しく、 社員の評価も正当に行うことができません。

スタジオネオでは、タスク管理アプリTrelloを使って、 会社全体の今動いているプロジェクトの様子や、個人が どんなタスクを抱えて、今どの作業を行っているかを 見える化させています。Trelloはメンバー共有型のアプ リで、1つのタスクを1枚のカード型のエリアに入力し

て、複数のカードをグループ化して画面上に並べドラッ グして自由にカードの位置を移動させることができます。 カードをクリックすると、詳細画面がポップアップで開 き、メモなどを記載することができます。

私たちの会社では、これを2通りの方法で活用をして います。1つは会社全体の業務を捉えるため個別のプロ ジェクトを1つのカードとし、「提案中」「実施中」「完了」 などのグループ分けしたエリアに配置して、それぞれの プロジェクトがどのような進行状況なのかをひと目で分 かるようにしています(図1)。提案段階のものを含める と30件以上が存在するため、全体を把握する助けにな ります。またプロジェクトごとの制作期間も登録すれば、 横軸に展開するカレンダーに表示され全体スケジュール も一目瞭然です。

もう1つの活用方法は、スタッフ個人を1つのグルー プと考え、個人のタスクを1枚のカードとして自らのエ リアに登録していきます(図2)。全員のタスクを並べて 見ることができるので、それぞれが抱えているタスクの ボリュームと内容が見え、さらに今作業中のものに赤い ラベルをつけ今何を行っているのかも把握できるように しました。同時にチャットツールのSlackでもプロジェ クトごとのチャンネルをつくっているので、そのスレッ ドを見てスタッフ同士の会話も見ることができ、今どの ような状態なのかといった空気を読むこともできます。



(図2) スタッフ全員の to Doリスト画面

1日の働きと成果が見える「勤怠管理」

デザインにおいては特に、恐らく設計においても時間ではなく成果で評価するという考え方があると思いますが、労務管理という点では従業員の勤務時間を把握し、適切な労働環境を整備することへの意識が近年強まっています。また成果を評価する上でも、どれだけの時間でこの成果を出せたのかを明確にすることは、評価者の感覚だけに頼ることなく、お互いにとってメリットのあるものです。さらに経営の観点からも、受注金額とそれにかける人件費のバランスから適切な利益を上げることができたのか、あるいは赤字案件だったかなどを把握することはとても重要な情報です。

当社の制作スタッフは裁量労働制ではありますが、個人のライフスタイルに合わせ個別に標準労働時間を設定しているため、テレワークにおいても勤務時間の管理は出社時と変わらず行っています。朝はzoomのミーティングに顔を出して始まり、1時間の休憩は各自のタイミングで取るため「休憩入ります」「戻りました」とSlackで報告、退勤時にも「本日は失礼します」とメッセージを入れてから業務を終えます。

勤怠管理は、自社オリジナルの業務管理システム(受 注・見積・請求管理・経営分析機能) を構築して運用し ており、その中にスタッフが入力する勤怠機能を設けて いるのですが、テレワーク環境下においてもこれを利用 しています。毎日の勤務時間と、携わったプロジェク トをリストから選択し日報入力を行い、プロジェクト ごとの工数管理も集計できます。さらに今年システム リニューアルを行い業務選択を簡単にし、日報の内容が 「メール送信」のボタン1つで、あらかじめ登録していた 管理者に内容がメール送信される仕組みをつくりました。 これによりSlackでは追いきれなかったスタッフの1日 の仕事内容をリスト形式で、端的に得られるようになり ました。Trelloでは予定が把握できるのに対して、ここ では実際に行った結果が明確になります。この発想は、 汎用型のクラウド勤怠アプリ「ハーモス勤怠」のお試し 運用の経験から自社のシステムに取り入れたものですが、 このクラウドアプリは無料で操作性も感覚的に使いやす く、たくさんのヒントを得ることができました。



(図3) ハーモス勤怠 1ヵ月の全スタッフの総勤務時間一覧

見える化を加速させるクラウド勤怠管理アプリ

その「ハーモス勤怠」では、入力する側にも管理する側にもとても使いやすい機能が実装されています。スマホでも入力できるため、スタッフは現場から直帰する場合もその場で勤怠入力を完了できます。現場への交通費などの経費申請も、領収書の写真を撮り、この画面から行えるのがとても便利です。私はまだ試したことはありませんがSlackとの連携もしているそうです。有給の自動付与、出勤簿や給与明細などの機能はもちろん、さまざまな結果がグラフで見える化することが近年のアプリの優れたところです。管理者はスタッフ全員の1ヵ月の勤務時間をグラフ表示で確認できたり(図3)、本人も自分の勤務時間レポートをグラフで見ることができます。

日報入力は別の画面に遷移し、あらかじめ登録されたプロジェクト名をプルダウンから選び、次に業務内容(打ち合わせ、設計、調査など)を選び、費やした時間を入力していきます(図4)。1日に複数のプロジェクトに携わっている場合はそれを繰り返していくと、それらの合計時間が自動計算され、実労働時間と合っていない場合はその差がアラートで表示されます。最後に「メール送信」ボタンを押して完了。面倒なイメージの日報入力もストレスなく行うことができます。

また管理者側からは、月間、プロジェクト別、社員別に工数の集計をリアルタイムで確認することができ、有料プランでは、あらかじめ社員の人件費を登録した上でプロジェクト収支の分析も行えるようになっています。「ハーモス勤怠」以外にも同様のクラウド型勤怠システムにもあるようです。当社が最終的にこの汎用型の勤怠アプリを選択しなかった理由は、プロジェクト収支の計算が月単位でしか集計できない点など、現在使用しているオリジナル業務システムと比較すると求めている機能がカバーしきれなかったことにあります。汎用アプリは、使う側が器に合わせる賃貸住宅のようなものですが、私たち独自の業務に即した経理と経営分析機能を重視し、オリジナル設計を選びました。

新型コロナウイルスにより加速されたDXは、多くのツールを私たちに与えてくれました。もはやテレワークか否かは問題ではありません。成果を上げるために必要なツールと、働き方を選んでいきたいものです。



(図4)ハーモス勤怠、日報、 プロジェクト登録画面

あり が かおる 有賀 薫氏に聞く

これからの食卓のあり方を 生活者の目線から提案する



今回はスープ作家として活動されている有賀薫さんにお話をうかがいました。 2011年から毎朝欠かさずスープをつくり、その写真を SNSに投稿。 Webメディアでの執筆やレシピ本の出版など、枠にはまらない自由な発想で、レシピ以外にも、食卓や暮らしのあり方について発信されています。 2019年にはご自宅に新しい形のキッチン「ミングル」を制作。プロトタイプとしてつくられたというこのキッチンについてもうかがいました。

―まずスープ作家になられた経緯から教えてください。

最初は朝が弱い受験生の息子のために毎朝スープをつ くり始め、それをスマホで撮って毎日SNSに投稿して いました。冷蔵庫の中にあるものでつくるだけですし、 子どもの頃からいったん入り込むとそればかりやり続け てしまうところがあって…。もう10年以上毎日続けて いますが、大変だと思ったことはありません。

スープづくりを1年ほど続けた頃にスープ写真の展覧 会を開いたら、それを見た方が「面白いから本にしなよ」 と言ってくれました。自分がライターをしていたことも あり、本の出版は身近でしたし、なにより料理本が好き でたくさん読んでいたので、正直スープ作家になりたい というより料理本をつくりたいという気持ちが先でした。 でも本が売れなくなる時代に、無名の主婦が簡単に本を 出せるわけがありません。そこで、「もう少しスープ作家 らしくならなくては」と、スープ・ラボというスープの 勉強会を毎月開いて、そのレポートをnoteという配信 サイトにアップしていきました。そうすることでWeb 上にレポートが重なっていき、徐々に皆さんに「この人 おもしろいことをやってる」「この人はスープ作家なん だ」と思っていただけるようになりました。

- 今では料理本を何冊も出版されています。有賀さん の料理はシンプルなので自分好みにアレンジしやす いです。

私は家の食事はシンプルで、身体にも家計にもつくる 人にも無理がない、毎日食べ続けられるものがいいと 思っています。

旧来の家庭料理は専業主婦の存在を前提に成り立って いて、手間もかかるし持続するのも難しい。それから、 今は頻繁に外食する家庭も多く、その味を家でも求めら れたりしますが、毎日外食を再現した料理をつくり続け られるでしょうか。スープ作家として仕事を始めてから、 生活者の側から「家のご飯は外食とは違ってもっと大ら かでいいのでは?」と強く感じ、新定番的なもの、料理 の骨組みのようなものを伝えたいと思っています。

---建築でいうスケルトンですね。

スケルトン!まさにそうですね。それぞれのご家庭で どんどんアレンジしてもらいたいです。我が家は主人が にんじんが苦手なので、きんぴらはごぼうだけでつくり ます。そのように家庭によってそれぞれの食べ方が絶対 にありますから、それを優先してほしいです。

私はスープ作家としてはまだ6年ですが、その前に30 年近く家族のために食事をつくってきたので、仕事の後 に買い物をする大変さや、鍋をひとつ洗うことがどれだ け気持ちの負担になるのかがわかります。だからレシピ の工程はなるべく少なくするような工夫もしています。

それから、料理の仕事をするなかで、レシピだけでは なく、これからのみんなの食事に対してどういうことを 発信しなければいけないのか自然と考えるようになりま した。今はSNSで個人の声をダイレクトに届けやすい 時代です。どうやったら便利になるかではなく、これか ら先の話をしたいなといつも思っています。

――現代の食卓のあり方をどのように見ておられますか。

私の場合、息子が食べるものにとても関心があり、少 し変わったものをつくっても面白がって食べてくれたこ とはすごく救いでした。でも、つくるものに注文をつけ られたり、つくったものをなかなか受け入れてもらえな いご家庭もたくさんあるのです。家は店と違って完全な る固定客。食卓で起こるコミュニケーションによっては、 料理をする人を苦しめてしまうことがあります。そのよ うな食卓のあり方が現在の大きな問題だと感じています。

今、世の中には情報が溢れていますが、その情報は意 外と平均的なものですから、みんながそれに合わせるこ とはありません。食卓はこうあるべきという決まりもな いのです。自分の生活や好み、家族、健康などいろいろ な事情に合わせてもっと自由に生活できたらいいのです が、そういうふうに暮らすためのツールがなさ過ぎます。

たとえば家もそうです。普通のサラリーマンで手が届 くのはせいぜい3LDKの分譲マンションで、間取りも決 まっていれば、キッチンも既定されてしまう。でもみん

なが収納力があって便利なキッチンがほしいかというと そうではないはずです。いろいろな暮らし方がある時代 なのに、その暮らし自体がないがしろにされていると思 うのです。ですから、生活者の側から「私はこういう暮 らしがしたい」ということを発信しています。

――ご自宅内につくられたキッチン 「ミングル」 についても教えてください。

「ミングル」はまさに新しいライフスタイルを提案するためにつくりました。95×95cmの正方形のテーブルに、上下水道とIHコンロ、食洗機が組み込まれた提案型のキッチンです。ミングルは"入り混じる"といった意味の和製英語だそうで、設計士さんが教えてくれた言葉です。みんなで共有できるキッチンにしたかったのでそれを愛称にしました。

1人暮らしのアパートのキッチンは、1口コンロがあるだけでスペースも狭く、調理設備としてあまりにもひどすぎて選択肢もまったくありません。もちろん家で料理をしない人もいるのでそうなっているのですが、その逆もあって、料理をしたくてもキッチンがないから興味をなくしてしまう人もいると思います。ある程度キッチンがしっかりしていたり、快適であれば、料理を始める人も増えて、将来的に健康な生活や自立的な生活を送るきっかけになるのではないでしょうか。

ミングルは、そうした1人暮らしのアパートや、2人暮らしの賃貸住宅などのキッチンを想定してつくりました。夫婦共働きで、夜もお弁当を買ってきて食べる場合、ミングルなら真ん中にコンロがあるので「味噌汁くらいならつくろう」となるかもしれません。IHコンロを組み込んだテーブルがあるだけで、生活は変わるのではないでしょうか。

それからミングルのいいところは、コンロから鍋を下ろせば仕事机になるところです。切る場所、火を使う場所、食べる場所、仕事する場所など、時間によってさまざまな使い方ができ、狭いけれどある程度豊かな場所が確保できます。結果的には、私たちのように子どもが家を出て2人暮らしになった夫婦にもちょうどいいことに気が付きました。

----ミングルのかたちは 1 から考えたのでしょうか。

最初はかたちも何も決まっていない状態からスタートして、建築士さんにいろいろな案を考えてもらいました。最初は机の大きさなど建築士さんの考える"こうでなきゃいけない"があったようですが、実際に来ていただいて食事をして見てもらいながら実現したい食卓のあり方やスタイルを伝えていきました。





机の脚の部分に食洗機が入る

キッチン 「ミングル」。 水道とIHコンロ、食洗機が組み 込まれ、ここで調理から食事、 片付けまでが完結する。

いちばんこだわったのは、家族の誰もが料理や片づけ に参加できることです。例えばカウンターキッチンは、 お母さんの居場所はキッチンの中というように、つくる 人の場所を決めつけてしまっていますよね。でもミング ルならテーブルを囲む人みんなが調理に参加することが できます。

ミングルをつくったことで多くの取材を受け、私がまるで特殊なことをしたように思われていますが、皆さん生活の中で困りごとや疑問に思うことはありますよね。それを自分から発信しただけなんです。ミングルによって料理をする時のコミュニケーションや、これまでと違う家族の対話が生まれています。

---生活の中での不満や疑問を、ものをつくって提案していくところにクリエイティビティーを感じます。

家族のかたちが多様になってきているのですから、食 卓もかたちを変えていいと思いますし、その方が現実的 な気がします。発想の骨組みとして「こういうキッチン もありですよね?」という私からの投げかけです。

建築家の皆さんもそうですが、メーカーの方やあらゆる方に、みんなの"生活"をもっと見てほしいと強く思っています。将来的には、ミングルが入ったアパートをつくり、理想的なキッチンのスタイルが実現できたらいいですね。

インタビュー:2022年9月2日 有賀さんご自宅にて 聞き手:中澤克秀・関本竜太・佐久間達也 (『Bulletin』 編集 WG)

PROFILE

有賀 薫 (ありが かおる)

スープ作家

約10年間、毎朝つくり続けたスープを土台にシンプルでつくりやすいレシピや、暮らしに根づく料理の考え方を各種メディアで発信。最新刊『ライフ・スープ くらしが整う、わたしたちの新定番48品』(プレジデント社)のほか、第7回料理レシピ本大賞入賞『朝10分でできる スープ弁当』(マガジンハウス)、『有賀薫の豚汁レボリューション』(家の光協会) など著書多数。

シンガポールの都市計画に思う



大木賀惠

緑の交易都市

北緯1度。シンガポールは、マレー半島南端に浮かぶ面積約700km²の島を中心に形成された都市国家である。土地利用計画や景観保護が政府主導で積極的に行われ、住民のシビックプライドが高いなど、熱帯の小さな島だが、都市計画に取り組むスタンスは旧宗主国のイギリスと近い。電柱のない市街地に、景観ガイドラインに則ったファサードが立ち並ぶ様子は、どこかヨーロッパ的であり、そこへ植えられた南国の樹木や植物が、熱帯の彩りを添えていている。



竣工から日の浅いガーデンズバイ ザベイと周辺地域。 右側はスーパーツリーの並ぶ屋外 エリア。海上は入港を待つ船で常 に混み合っている

また、大航海時代以前から、東洋、中東、アフリカ、西洋を結ぶ交易の要として今日も機能している地である。1942年から3年間、日本軍による占領が社会やインフラに非常に暗い影を落とすが、戦後は東南アジアでいち早くコンテナヤードを整備するなどして国際舞台に復活し、上海に次ぐ世界第2のコンテナ港(2021年)や、年間6千万人以上が利用する(2019年)チャンギ国際空港に象徴されるような、国際的な中継都市として発展を続けている。まもなく植民地化から200年、独立から60年の節目を迎えるが、東西の間に浮かぶガーデンシティーを標榜するこの都市は、どのように今日のアイデンティティーを築いてきたのだろうか。

イギリスによる植民地化

19世紀前半にイギリスによる統治が始まると、ジャングルに覆われていたこの地に現在の都市計画の基盤が築かれ始める。ヨーロッパ、中華、インド、マレー系など、さまざまな人種が入植し、住宅、教会、寺院、モスク、公園、植物園などが整備されていく。折衷様式であるペラナカンスタイルや、インターナショナルスタイル、アールデコなど、比較的バラエティーに富んだ建造物が

この期間に建てられ、港町らしい異国情緒のある景観を 形成した。この時代のシンガポールは、現在のクリーン で緑豊かなイメージとは異なり、かつての香港映画に出 てくるような、港町らしい喧騒に満ちていたという。北 杜夫氏の『どくとるマンボウ航海記』に描かれた1958年 当時のシンガポールの港や観光地の様子からも、そのこ とを察することができる。





左:金融街の道教寺院、ショップハウス、高層ビル右:金融街に隣接するエリアの路地。 下町の空気が漂う

独立と都市計画の新たな出発

第二次大戦後、東南アジア各地で起きた独立の流れに乗り、1963年、シンガポールを地方都市として含むマレーシアが、イギリスから独立する。しかしマレー色の強い中央政府と、中華系住民の多いシンガポールの間には大きな軋轢が生じ、1965年、シンガポールはマレーシアから一方的に追放される形で独立を余儀なくされる。

資源やライフラインを半ば断たれた熱帯の狭小な土地でどうやって生き残っていけばいいのか。建国の父、リー・クワンユー初代首相が、独立会見で涙を見せたエピソードは有名である。しかし、この不本意な独立への悔しさをバネに、首相の強力なリーダーシップの下、国外からの投資の誘致、土地資源の最適化、住宅供給、民族融和など、山積する課題に政府は次々と取り組み始め、シンガポールは都市間競争の階段を異例のスピードで駆け上っていくことになる。

1966年、土地収用法が策定される。国土の大半を政府が所有し、戦略的な土地利用計画を実施する基盤を整えるためである。個人や企業は国有地を期間限定でリースすることはできるが、政府がその土地を必要と判断した場合は、速やかに返却しなければならない。また、土地の購入はシンガポール人に限定されている。

次ぐ1967年には現在のシンガポール像の土台となる

ガーデンシティー構想が首相によって提唱される。植樹や、公園・緑地面積の拡大、効率的な交通網の整備等、国家的な緑化プロジェクトがスタートする。清潔で便利で緑豊かな都市空間をすべての国民が等しく享受できる環境は、海外の投資家にとっても魅力的に映り、国民と経済活動の双方に良い影響をもたらすことを見越していたといえる。現在は、植物園やガーデンズバイザベイなど、国立公園局に委ねられた面積は、実に国土の10%以上に及び、それらは約320kmに及ぶパークコネクターと呼ばれる道路網によって結ばれているが、早朝にこれらコネクターに行ってみると、多様な人種や国籍の人々がジョギングやエクササイズに勤しむ光景に出会うはずだ。

近代建築、そして丹下健三の役割

1971年、国土利用の指標となる「コンセプトプラン」が策定される。このプランは、約10年ごとに見直しを加えられながら現在も活用されているが、この実現に、I.M.ペイ、フィリップ・ジョンソン、ノーマン・フォスター、モシェ・サフディ、丹下健三、黒川紀章、慎文彦など、多くの建築の巨匠が主要な公共施設や商業施設のデザインを通して関わってくる。

特に丹下健三は特別な存在である。1970年に香港大学でリー・クワンユー元首相と同時に名誉博士号を授与された際、2人は意気投合し、その後、重要なランドマークとなる複数の作品や、マリーナサウス地区のマスタープランを手がけるなど、数十年にわたってシンガポールの都市形成に深く関わっていく。UOBプラザやインドアスタジアムの持つ軸線やオープンスペースが周囲の空間を有機的につないで、広く人々に開かれた「場」を形成している様子は、ローマのカンピドリオ広場のようですらある。厳しい施主として知られるシンガポール政府が、多くのプロジェクトを氏に委ねた背景には、氏の都市全体の発展を見据えた姿勢が、リー・クワンユー元首相をはじめ、政府高官らの目指す国家像と強く共鳴したからではないだろうか。





左:旧最高裁判所のクポールの背景に並ぶ、 丹下都市建築設計による一連の作品 上:UOB ブラザから眺めるコロニアル地区。 正面の円筒状のビルはI.M. ペイ設計のホテル。 左の円盤状の屋根が見えるのはノーマン・フォ スター設計の最高裁判所

コンパクトシティーの到来に向けて

建国40年にあたる2005年頃から、ガラスを多用した

透明でボリューム感のあるデザインがトレンドに加わり、透ける空間の中にはさまざまなサービスが配置され、コンパクトシティーの概念は可視的なものとなる。街中で見かける緑はさらに増え、都市計画では、ガーデンシティー(田園都市)に代わって、シティーインザガーデン(田園の中の都市)という立体感ある表現が多用されるようになる。より効率的な空間利用を求めて、IT、エネルギー効率、環境負荷の軽減といった要素が積極的に導入され、大空間の中に水、緑、職、住、遊などを3次元的に配したダイナミックな空間が一斉に開花していく。

代表的なプロジェクトとして、モシェ・サフディが手がけたマリーナベイサンズや、チャンギ空港のジュエル、DPアーキテクツとウィルキンソン・エアーによるガーデンズバイザベイ(ドーム部分)などが挙げられる。これらガラスに覆われた巨大空間ではセントラル冷房が採用さ



れているが、マリーナベイ エリアは、湾(現在は淡水貯 水地)の水を利用した地域冷 房網で連結されている。こ の技術を用いた一体的な地 域開発手法はすでに中国主 要都市にも輸出されている。

雨水を再利用した滝を中央に配したジュエル (チャンギ国際空港内の商業施設)

建国60年に向けて

大胆な国土改造により、熱帯の近代オアシスとして発展を続けるシンガポールだが、海外からの不動産需要が増え続け、慢性的な地価高騰に見舞われている。国民と永住者以外の者が不動産を購入する場合は販売価格の20%を超える印税を義務付ける等の対策を講じてはいるが、熱が冷める気配はない。ただ、このように都市間競争で常に優位に立ち、さまざまな国にとって経済的に重要な拠点であることは、外交において強力な切り札となっている。

独立から60年近くが経ち、巨匠らの作品が緑の中に 佇むシンガポールのランドスケープからは、建築の社会 的責任や可能性をさまざまなスケールで感じることがで きる。丹下氏の数々の仕事も含め、ここには今の日本の 都市計画にとって有益な情報が数多く詰まっているので はないだろうか。

大木賀惠 (おおき かえ)

1999年京都工芸繊維大学卒業、フランス政府給費留学生として渡仏。 2003~2007年フランス国鉄グループ勤務。2004年パリ・ラ・ヴィレット 建築大学卒業。2008年パリ第4大学博士課程修了。2007~2022年シンガポールにて都市開発関連の翻訳や日本文化や日本語の紹介に従事。

北陸支部

次世代の建築家育成を通して 地域会の活性化をはかる



原田 学 北陸支部 福井地域会会長



竹内申-北陸支部 石川地域会副会長 富山地域会会長



北陸支部

北陸支部の活動

北陸支部は全国に先駆けて準会員制度を発足させるな ど、早くより次世代の建築家育成に力を入れてきた。福 井地域会では小学生以下の子どもを対象とした絵画コン クール事業、石川地域会では小学生を対象に街づくりを 考える子供建築塾を開催してきた。子どもたちに建築の 面白さを伝える事業は福井・石川地域会の中でしっかり 定着し、参加を楽しみにしている子どもたちも増えてき ている。

富山地域会は支部の中で準会員活動が最も活発で、会 員同士の定期交流、勉強会、正会員事業のサポートなど が行われていたが、小学生から大学生までを対象とする ような次世代の建築家育成事業はあまり行われてこな かった。そこで福井・石川地域会のように活動にも力 を入れようと話し合い、建築に興味を持ち始めた高校 生を対象とした事業「ONEワク」(1日設計課題 one-dayworks) を2018年にスタート。翌年以降は大学生を含め た事業へ進化し、コロナ禍にあった近年はオンライン化 により北陸支部内の学生が参加するような事業となって いる。(『JIA MAGAZINE』386号参照)

その後、福井地域会では新たに高校生を対象とした青 少年育成事業、石川地域会では高校生のためのワーク ショップを開始している。このように、支部内で情報交 換しながら、それぞれの地域性を考慮したかたちで次世 代の建築家育成に向けて活動している。 (水野 敦)



石川地域会/子供建築塾



富山地域会/高校生を対象と した事業「ONEワクト

福井地域会 高校生支援活動

福井地域会は、18年以上にわたり小学生を対象に絵画 コンクールを通じて青少年育成を目指して活動してきた が、世の中の建築への人気減少と何より会員減への焦り などから、若い世代のリアルな建築への思いが今どう なっているのかもう少し知りたいという意見が多くあっ た。そうした中、富山のワークショップから大いに刺激 を受け、建築に興味を持っている若い世代がもう少し上 の世代に直に触れあえる機会を模索した。

会員のツテにより2021年に工業高校の授業を手伝う 機会を得て、建築甲子園へ出品直前の生徒たちに批評ア ドバイスをしたり、また自分たちが実際に仕事で使って いる3Dでの提案事例や、プレゼンでのコツなどを話す ことができた。全部で3回、延べ12人が参加した。そ こで衝撃だったのは、今後建築の道に進みたいと考えて いる生徒は19人中ほんのひと握りしかいなかったとい う事実だ。

今年はさらに高専でもこのような機会を得られること になり、この10月と11月に授業にお邪魔することとなっ ている。さすがに高専では将来的にも建築に進もうと考 えている生徒が多いそうである。しかし、事前の打ち合 わせの中で教師の多忙すぎる実態や、進路指導などの苦 悩を知ることとなった。このように専門教育の実態に触 れることができただけでも、我々の業界の未来に、より 具体的な活動指針を計画する上で重要な知見となるであ ろう。

毎年、建築士会と建築士事務所協会、JIAの3会合同



工業高校の授業を支援

で行っている福井建築賞の公開審査会に、昨年の工業高校の生徒が見学に来てくれた。授業支援での交流を通じて、多少なりとも建築の世界に興味を持ってくれたことにつながっているのかもしれないと思うと、皆、これからも継続していくことが必要と感じている。

今年が2年目で、学校側の諸事情とこちら側の人員の やりくりなど課題はあるものの、長期的な視点で花が咲 き実になることを期待したい。まだ種をまいて発芽した ばかりなのであるから。 (原田 学)

石川地域会 高校生のための建築ワークショップ

石川地域会は、2021年から谷口吉郎・吉生記念金沢建築館が主催する「高校生のための建築ワークショップ」の企画および運営を全面的にサポートしている。石川地域会では、これまで10年以上にわたって小学生を対象とした建築ワークショップを開催してきた。その活動に加えて「より近い未来に地域の建築文化の担い手となる人材を育てる」という趣旨から、高校生を対象とするワークショップに注力することとなった。

金沢市内の高校を対象に募集を行い、コロナ禍ではあったが、2021年は11名、2022年は12名の生徒が参加した。ワークショップは2日間行われ、参加者たちは与えられたテーマに対して建築提案を考え、スケッチと模型を作成してプレゼンテーションを行う。高校生1人につき建築学科の大学生1人がサポートとしてつくため、2日間とはいえ見応えのある作品が並ぶ。

2021年のテーマは「みんなのバス停」で、バスを待つのが楽しくなるようなバス停を考えてもらった。写真の作品は、21世紀美術館周辺の芝生がめくれ上がった丘のようなバス停で、美術館側からは芝生しか見えず、道路側には洞窟のような空間が広がっている。2022年のテーマは「まちの居場所」で、金沢のまちの中心部にほっとひと息つける小さな居場所(休憩所)を考えてもらった。どちらも小規模ではあるが、大学生に引けを取らない魅力的な建築が提案された。開催後のアンケートを見ると、2日間を通して大学生とコミュニケーションを取ることも良い経験となっているようである。建築を学ぶ楽しさや建築の魅力を近しい世代から聞くことは、建築の領域へ進もうとする高校生たちのモチベーションを確実に高



「みんなのバス停」 をテーマにつくら れた模型

めてくれそうだ。

2年間の活動を通して、高校生を対象としたワークショップの可能性を大いに感じている。近い将来、彼らが我々のメンバーとして活動してくれることを期待しながら、今後できる限り継続していきたいと考えている。

(竹内申一)

富山地域会 ペチャクチャ

7月初旬、富山大学芸術文化学部との合同イベントとして「ペチャクチャ」を開催した。20filmを20秒でプレゼンテーションするこのスタイルは、建築家のアストリッド・クラインとマーク・ダイサムの2人によって考案され、すでに20年近く経つが、あえてこの時期に再びというのは、企画立案をされた富山大学芸術文化学部の上原雄史教授の熱い想いがある。日頃から学生を指導するなかで、彼らの元気のなさが目に付き、特に自分の考えた課題に対してネガティブな意見を受けると、途端に思考回路が止まってしまう。そんな学生に多角的な視点を持ってもらいたいということから、建築家たちが日ごろ何を面白いと考え、何に挑んでいるのかを学生たちに話しかける機会をつくりたいと考えた。

また私たち富山地域会は、地域の建築家たちと大学との交流が薄いことを危惧し、学生たちをサポートするようなプログラムがないかと考えていたところでもあった。

今回のペチャクチャは「気付き」をテーマに、教員、学生を含めた10名がリレー形式で発表し、その後、来場者の質問を受けながらトークセッションを行った。年齢、性別、職歴などの異なる10名の発表はそれぞれに魅力があり、当初目的であった複数の視野を持つことの意義を十分感じさせてくれるものとなった。この日の手応えをもとに、11月には第2弾として、高校生を巻き込んだイベントを開催するべく、現在準備中である。

今後は「ONEワク」で接点が生まれた高校生と大学をつなげ、さらには就職先として設計事務所をつなげ進路を見えやすくすることで、建築家を志す若者の裾野を広げることができ、地域会の活性化につながる好循環を生むことに期待している。 (水野 敦)



富山大学芸術文化学部と合同で行った「ペチャクチャ」

遺構や建築が織りなす時代性

―港区の景観を守るため

地域に向けた啓発活動も実施―



港地域会 今井 均

2015年開催の第24回保存問題東京大会時に、東京14地域会の協力のもと「未来へ継承したい環境・景観・建造物・建築物」をテーマにまとめ、 大会シンポジウムで各地域会から発表されました。その時の資料をベースに「未来へ継承したい風景」として連載しています。

港区は江戸時代から今日まで、日本の中心的な存在を担ってきました。現在150ほどある大使館の半数以上がここ港区にあります。東京湾に面した海岸線も長く、周辺の城南五山と言われる八ツ山、御殿山、島津山、池田山、花房山などを中心に海抜30メートルに迫るアップダウンの変化に富む地形のなかに、歴史をしのぶ遺構や仏閣、はたまたかつての大名家の邸跡など、各所に凝縮され生きている歴史が見られます。近年、高輪地区再開発の際に発掘された、品川駅〜田町駅間の海上に造られた築堤は、日本初の鉄道開業時のものとして話題に新しいところです。恐らく、今後も開発に伴うこういった遺構が日の目を見る可能性も高いと思います。言わば、ミステリアスな江戸から近代の歴史的埋蔵物の発掘も期待できる地域でもあります。

高輪台地よりの風景

クウェート大使館

設計: 丹下健三/1970(昭和45)年

三田4丁目、聖坂にあるクウェート大使館は丹下健三の設計で1970年竣工のものだが、その迫力は現代建築には見られないものがある。港区の多くの大使館のなかでもそういった意味では唯一のものといえよう。この聖坂には大江宏設計の普連土学園や古代の生活が偲ばれる亀塚公園など見どころも多く、高輪から三田界隈は港区独特の歴史絵巻ともいえそうなところである。

旧高輪消防署

設計:越智操/1933(昭和8)年

高輪地区にある旧くからのランドマークとして、地域の人びとに従来より親しまれ、大切に保存されてきた。建築的にも十分魅力があり、その存在感と知名度は港区内においても群を抜いている。

明治学院大学・建築群

1863年より

この大学の歴史は古く、またその時代ごとの建築も特徴あるものとしてキャンパスをつくってきた。西欧の木造建築の古を思わせるインブリー館、記念館、チャペルなどは学院のイメージを補完するものとしても重要な存在で建築的にも見応えがある。東側の国道1号線沿いは超高層マンションが席巻して久しいが、大学の存在感はその後も建築の魅力や十分なボリューム(建築家・内井昭蔵による新校舎群もその存在感に寄与している)により、近隣一帯にひとつの秩序めいたものを感じさせてくれる。



高輪台地よりの風景 (高輪4丁目から)



クウェート大使館(三田)

旧高輪消防署(高輪)



明治学院大学・建築群(白金台)

八芳園

明治後期

渋沢栄一の従兄弟喜作が島津家の抱屋敷跡に明治期に邸宅を構えた。その後いくつかの変遷を経て現在の八芳園となった。広大な緑豊かな敷地には、池を取り巻く茶室をはじめとする木造建築群が見られる。

東京大学医科学研究所 他

設計: 内田祥三/1940(昭和15)~1942(昭和17)年

鉄骨鉄筋コンクリート造で、本郷キャンパスに類似したゴシックの手法で統一されている。内部空間にも手の込んだ手法が随所に見られ、外部はスクラッチタイルを全面的に採用。当初のスチールサッシはアルミに変えられたところもあるが、全体として創建時の姿をよく保っている。敷地内には港区郷土歴史館の入る旧国立公衆衛生院があり、広々とした外部空間が特徴でもある。

東京都庭園美術館(旧朝香宮邸)

設計:宮内省内匠寮/1933(昭和8)年

フランス留学中にアールデコを実見した朝香宮が、帰国後、自邸建設時にアールデコ様式を希望したといわれる。建築全体は宮内省内匠寮、インテリアをアンリ・ラパンが中心に担当。その後日本庭園も備え、茶室「光華」もつくられた。 幾多の変遷のなかで、民間に一時払い下げられたが、1981年に都の所有となった。一般開放され、近隣はもちろん、遠方からの来園者も多い。美術館は隣接する自然教育園の広大な自然と一体となって、都心にいることを忘れさせる。

聖オルバン教会

設計:アントニン・レーモンド/1956(昭和31)年

木造のキリスト教会。アントニン・レーモンド設計の教会はいくつもあるが、都心で木造、丸太の小屋組を有するもので現存するものは珍しい。大変よく手入れされ、内部空間の木造の小屋組の良さが創建時のまま残っており、現代建築に囲まれたエリア内でもあることから、体験する価値があろう。

飯倉ノアビル

設計:白井晟一/1974(昭和49)年

設計は白井晟一。ビルのオーナー (創業者) の建築に対する意識の高さを感じる。このビルは1974年以来、原形の状態を保ち、東京飯倉のランドマークとしても貴重な存在。

旧山田守 自邸

設計:山田守/1959(昭和34)年

多くのモダニズム建築の名作を世に送り出した建築家 山田守の旧自邸。現在1階は喫茶室として一般に開放されているが、原型のイメージは保たれ、都心青山に現存するモダニズム住宅として貴重なものである。鉄筋コンクリート造3階建て住宅。

桂坂

そびえ立つ石垣のイメージが強い港区のこの辺り。高輪3丁目~白金台~ 目黒駅までの丘陵地帯の土地の状況がよく分かる遺構となっている。石垣は 健全な状態と見受けられるが、近年の開発がこの石垣に及ぶか不安でもある。 明治45年来のものだが、確かな築造年代は不明。古地図(明治期の地図)で は坂は2ヵ所クランク状の曲がりがあるが、現在は開削された後の遺構である。



八芳園(白金台)



東京大学医科学研究所(白金台)



東京都庭園美術館(旧朝香宮邸)(白金台)



聖オルバン教会 (芝公園)



飯倉ノアビル (麻布台)



旧山田守 自邸(南青山)



桂坂(高輪)

「子安の丘みんなの家」

―多世代交流拠点づくりでまちを楽しく魅力的に―



小山将史

団体設立から整備が完了するまで

2019年春、所有者かつグループ代表の田中裕治氏より、「家賃はいらないので子安台の空き家を地域のために使えないか」というお話をいただき、改修して地域の多世代交流拠点にする提案をしたのが始まりです。

具体的には、2020年度の「ヨコハマ市民まち普請」に応募して、スタートは3人だったメンバーもチラシ配りやプレイベントを開催しながら仲間や理解者が約30人集まり、整備事業(助成対象)に採択されました。

2021年度は主に空き家の整備期間で、2021年10月の解体工事から開始し、安全対策をした上で、できることはメンバーで作業。多くのボランティアの方々にもお手伝いいただき、ご賛同くださった企業の方々には協賛という形でご支援いただき、安全性の高い整備では一部イベント化して地域との交流も実施しながら、無事2022年3月末に竣工を迎えることができました。

運営開始から現在に至るまで

「子安の丘みんなの家」は地域の繋がりを大切にした 助け合いのまちづくりをコンセプトとして、まちの困り ごとを解消できるようさまざまな活動を展開しています。

2022年4月に運営準備も兼ねてプレオープンし、5月に正式オープンを迎えました。主な事業は毎週金曜日夜に開催の「家族食堂」で、地域在住の料理研究家の阿部博美さん中心に、栄養バランスの取れた美味しい料理を提供。子どもからお年寄りまで多世代交流のきっかけづくりをしています。地域の子育て中の親御さんからは、仕事帰りにお子さんと一緒に食事もでき、ボランティアスタッフと気軽におしゃべりをしながら寛げるので大好評です。それから、周知活動の一環として、月1回以上のイベ

ントを開催。これまで、和菓子づくりやキャンドルイベント、ダンボールやコンクリートを使った工作イベント等を開催して、少しずつ周知されてきたところです。

また、月1回十数名いる運営メンバーで定例会を開催 して、より良い居場所になるよう運営を進めています。

建築家の力でまちづくりの0から1へ

「子安の丘みんなの家」への関わり方については、当初はまちづくりコーディネーターとして、整備が始まってからは建築家として、設計から自主施工指導まで関与し、運営が始まってからはメンバーとして、イベントの企画や広報活動を支援しています。整備から運営までさまざまな分野で活躍するメンバーと汗を流しながら一緒に活動することで、より絆が強くなったと思います。

また、多くの方々は何かやりたい!と思っていても、 実施までに相当のエネルギーが必要なので、構想だけで 終わってしまうことが大半なのではないでしょうか。整 備から運営まで関わることはとても大変でしたが、その ような中で、0を1にする建築家の力はまちをプラスに 変える原動力になると今回強く実感しました。

職能を活かしたまちづくりを目指して

今回の事例は小さな空き家を整備して1つの交流拠点 としたに過ぎないかもしれませんが、地域にとっても、 職能を広げる意味でも、大きな一歩だったと思います。

また、おそらく「子安の丘みんなの家」以外にもユニークな拠点が増えていく、そんな予感がします。

すでに関わっている方が多いと思いますが、より多くの建築家がまちづくりに整備から企画運営まで積極的に 関わることで、まちをより楽しく、建築もより魅力的で 持続可能なものにしていきましょう!



(4.5) (6.2) 和菓子づくりイベント



運営メンバーでの定例会議



「子安の丘みんなの家」 https://minnanoie.site

建築士の注意義務



山崎哲法律事務所 弁護士 安藤 亮

今回は、設計者はいかなる注意義務、責任を負うのかについて説明させていただきます。少し小難しい話と思われるかもしれませんが、普段の設計業務でどのような点に気を付けるべきかをお伝えできればと思います。

善管注意義務と不法行為責任

建築主と設計者との間の設計契約の性質については議論があるところですが、有力説である設計契約が準委任契約であるとする見解を前提とすると、設計者は建築主に対し、善管注意義務を負うということになります(民法644条)。善管注意義務とは、一般的には、債務者の職業、その属する社会的・経済的な地位などにおいて一般に要求されるだけの注意義務、と言われています。また、設計者は、判例上、契約関係にない第三者に対しても、建物としての基本的な安全性を損なう瑕疵については不法行為責任を負うとされています。

この説明では抽象的でよく分からないと思いますので、 具体的な例を見ていきましょう。

浸水被害が発生した場合に設計義務違反が認められるか

マンションの1階部分が浸水することについて、設計者の損害賠償責任が問われた事件についてご説明します。マンションの建築販売を企画する建築主Aが、設計監理会社Bにマンションの設計監理を依頼し、施工会社Cがマンションを施工しました。マンションの完成直前に1階部分が浸水する事故が発生したのですが、建築主Aは、防潮板を設置しただけで敷地に盛土をすることはしませんでした。竣工後、建築主Aは購入希望者などDを含む第三者にマンションの住戸を売却しました。しかし、1階部分に毎年のように浸水被害が発生する欠陥が判明したため、購入者Dが建築主Aおよび設計者Bに対し、損害賠償を請求し提訴したという事件です。

設計者Bに対する請求に関するDの主張は概ね以下のとおりでした。すなわち、①Bは、本件マンションの立地条件では、雨水処理に十分の配慮を行わなければ浸水被害が発生することを予想し得たため、安全で災害の起こらないマンションを設計するために必要な調査・設計を行うべきだった。②本件の立地条件では、盛土を行わ

なければ浸水被害が発生しかねなかったので、盛土等の対策をする設計義務があったが、Bは盛土等の対策をする設計義務に違反した、というものでした。

裁判所は、まず、地表面をそのままにした設計では完成したマンションの1階部分に浸水事故が発生しやすいため、販売したとしても、買主から苦情が述べられ、紛争に至ることが予想されるので、浸水対策を講じる必要があると判示しました。その上で、建築主が地表面をそのままにした設計を委任した場合に、受任者がその指示どおりに設計しても、建築主に対して責任を負うべきものではない、と設計者Bの責任を否定しました。つまり、設計者は、建築主から依頼された前提条件を超えて、盛土等の対策を盛り込んだ設計義務まで負うことは無い、という判断をしました。

紛争に巻き込まれないために大切なこと

上記の裁判例を通じて私が最もお伝えしたいことは、 設計者の責任が否定された論理自体ではなく、設計者と していかなる注意義務が課され、責任を問われる可能性 があるかを頭の片隅に置いて設計していただきたいとい うことです。漫然と設計をしたことにより想定外の責任 を負わされることのないように、建築主との間で設計の 前提となる所与の条件をきちんと確認する等、コミュニ ケーションを取って設計していただきたいと思います。

実際、施主と施工者との間の紛争に設計者も一緒に巻き込まれるという例がよくあります。私の経験でも、水漏れの現象が発生した場合に、施主から施工者に対して施工不良を理由とする損賠賠償請求がなされた際、設計者に対しても、およそ水漏れが発生しないように配慮して設計すべき義務がある(のに違反した)という主張をされることがありました。建築基準法等の法規、あるいは技術基準に反していないので義務違反はない、と反論することがありけですが、法規や基準に適合していたとしても、設計時に、施主や施工者とコミュニケーションを今少し丁寧にすることで、お互いの認識の違いを解消し、納得を得ることができ、トラブルの発生、ひいては裁判に巻き込まれることを避けることができるのではないかと思います。

[旧江戸御府内最古の店蔵 | 保存再生計画

「店蔵」を解体してわかったこと



このほど戸建ての自宅を小規模の集合住宅に建て替え た (写真①)。2020年までは「旧江戸御府内最古」といわれ る店蔵を玄関とした「店蔵+主屋」で暮らしていた。

「主屋」の建築は昭和7 (1932) 年、「店蔵」は江戸中期・ 宝暦年間(1751~1764年)にさかのぼる(写真②)。明暦 の大火のあと現在の南麻布に仙台藩松平陸奥守(伊達政宗 公)の下屋敷ができたことから、大名屋敷への出入り商人 の町がつくられていったようだ。江戸中期のこの地の「沽 券」(写真③)などの資料によると、均等の間口の長屋が 道の両側に一列に軒を連ねて並んでいたことがわかる。

我が家は近江商人としてその一角に店を構え薬屋とし て商いを始め、徐々に炭・米・薪なども扱うようになった。 その「店蔵」には薬箱でもあった箱階段、提灯箱、薬看板 などが往時のおもかげを留めていた(写真46)。明治以 降商店街として盛えていたこの通りも、昭和に入り、戦 後は徐々に「蔵」を持つ商店もなくなり、ついに我が家の 「店蔵」が唯一の「蔵」となってしまった。

旧商人町の最後の遺構として「失いかけている町の歴 史と文化」の証を新たな提案のもとでこの地に残そうと 考え、「店蔵」を組み込み、それに調和する集合住宅に建 て替えることにした。質実な近江商人の末裔として、江 戸中期の質素な「店蔵」をいかに残し利活用していくか、 「リビング・ヘリテージ (生きた文化遺産)」として次代へ と引き継いでいきたい。悩んだ末の保存再生計画である。

店蔵をいったん解体し、すべての部材を滅菌殺虫処理し、 傷んでいる部分を「修補」し再建する。その部位に将来の ために「令和参年修補」の烙印を押した。柱、梁の多くに は経年劣化、白蟻被害があり、火災により炭化した部分 もあった。「金輪継ぎ」などの構法で根継ぎしたものも多 い。箱階段をはずしてみると、太い竹と太い荒縄で組ま

れた「竹小舞」の土壁の土の多くは、下方へ崩れ落ちていた。

製材の機械のなかった時代の柱や梁、天井材などは、 すべてチョウナ、オノ、カンナ、ヤリガンナといった大 工道具で削りながらつくられている(写真⑤)。元・奈 良文化財研究所の研究者や大学教授らの立会いによって、 この「切削痕」が建設年代を分析し、特定する貴重な証拠 となることも初めて知った。

店蔵の玄関には治安のための手斧仕上げの指物を渡し た吊大戸(潜戸付)があり、その指物には「安政七庚申正 月廿五日、建具屋治助造之」という墨書がある。その袖 には吊戸を連結固定するための小扉(引戸)がついている。 解体時、店蔵外部両脇の封印されていた戸袋から戸車付 きの「土壁防火扉」6枚が発見された(写真⑥⑦)。各扉と も堅框と上框は鉄板包に、下は銅板包となっている。いわ ゆる戸板部分は全面土壁仕様で、上塗は黄大津壁仕上げ としている。極めて貴重であるとの研究者の提言により、 うち1枚は港区郷土歴史館に保管収蔵された。2年に一度 は大火があった江戸時代の防火戸で、店蔵の正面の格子戸 全体を覆い、火災の延焼を防ぐ重要な役割を担ったようだ。

「店蔵」は8メートル四方の小さなものであるが、さま ざまな文化史と技術史の語り部である。解体は建築家と しての私にあらためて多くのことを学ばせてくれた。

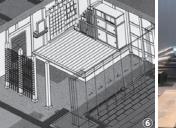
今回の保存再生工事にあたっては、店蔵に調和させる 外観全体は、いぶし瓦、薄鉛色の現代版漆喰、杉板本実 加工化粧型枠によるコンクリート打ち放し、SUS製によ る銀色の金属製簾戸、溶融亜鉛メッキ仕上げの金属手摺 等で、古来からの「銀古美」の趣の佇まいとした(写真①)。 消滅しつつある歴史ある江戸の町並みの「最後の時代の 証人」として、かけがえのない原風景を未来へとつない でいきたいとの想いである。



上:店蔵、下:「沽券」









発見された「土壁防火扉」

下:大梁の 店蔵内部の「箱階段」と「土壁防火扉」 上:店蔵内部、 「切削痕」の分析

建築の仕事・これまでとこれから



内海 彩

デジタルファブリケーションと 建築家の公共性

塚越智之

大学を卒業し社会に出てそろそろ30年。月並みだが、本当にあっという間だった。社会人生活の振り出しは山本理顕設計工場で、「世界都市博覧会」の会場設計の担当だったが、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、都知事選の結果、博覧会中止という波乱の1年目を経て、「岩出山中学校」の現場監理が実務らしい実務の始まりだった。建築が立ち上がっていく傍らで多くのことを吸収できたのだが、如何せん大変な現場で、実を言えば校舎が竣工する頃には「もう建築なんかやめよう」と決意を固めていた。その心が変わったのが「はこだて未来大学」のプロポーザルだ。スタジオという大空間の提案をつくりながら、世の中にないものを具体的に提案できる面白さに目覚めた。もしプロポが通ったらもう少し頑張ってみよう……そして今日に至る。

独立して、仕事は少なく時間はたっぷりあった頃、高層木造の可能性を考える研究会に参加し、それがチーム・ティンバライズというNPOの活動として続いている。研究会メンバーで2003年に着手した「下馬の集合住宅」は、構造計算書偽造事件やリーマンショック、東日本大震災を経て2013年にようやく竣工した。唐突に始まったかに見える木造との関わりは、建築を学び始める以前に親しんだ田舎の風景や暮らしと再び向かい合う機会となり、同時に社会や制度、異分野へ視野を広げるきっかけになった。

ふと舞い込んできた物事に「この一球は絶対無二の一球なり」と取り組み、そこから世界が広がってきた30年かと思う。この先も脚の動く限り懸命に走り、来た球を丁寧に返し続けよう、というのが今の私の抱負だ。



アーブル自由が丘 (2022年1月竣工)

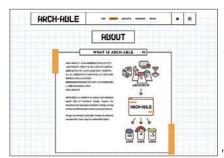
近年3Dプリンターやショップボットといったデジタルファブリケーションを利用できるオープンラボ、加工サービスが普及し、こうした技術が身近なものとなった。また建築分野に於いてもこうした技術を利用した作品を目にすることが増えている。私たちはこうした技術の普及が建築家と社会の関係に何をもたらすのかに興味がある。

今日まで、建築家のデザインの多くは特定の場所に特化してつくられ、他の場所で再現されることは稀だった。しかし、設計時につくられたデジタルデータに基づき加工を行うデジタルファブリケーションの特性を活かせば、そのデータを使ってさまざまな人が、さまざまな場でそのデザインを利用することができる。それが可能となれば、特定のクライアントのためのデザインが公にも向けられることとなり、より直接的に公共性を帯びるのだ。

そこでデジタルファブリケーションを用いたデザインのデータを集め、製作手順を添えてアーカイブしたウェブサイト ARCH-ABLEを立ち上げた。利用者はここから加工データをダウンロードした後、オープンラボや加工サービスを介して材を加工し、サイトにある手順に沿ってデザインを再現できる。各々のデザインに設定されたCCライセンスを守る限り自由に利用でき、現在10の団体による14のデザインをアーカイブしている。

今は家具やインテリアの規模に留まっているが、将来的には法規制等をクリアし、より大きなスケールでこの活動を展開したいと思っている。これにより空間の担い手自身が、身の回りを設えることができる環境を整えることを目指し、現在もサイトの周知とアーカイブ活動を行っている。

〈注〉特定非営利活動法人コモンスフィアが提唱する著作権のルール 作品を公開する作者が「この条件を守ればデータを自由に使って構 わない」という意思表示をできる枠組みが定められている



ウェブサイトARCH-ABLE

交流委員会 Bグループ

コロナ禍での活動をとおして



保坂真美子 交流委員会 Bグループグループ長 Bグループ代表幹事



向 利也 交流委員会 エフワンエヌ

交流委員会Bグループは、正会員3名と、防水・塗装・ 左官等を取り扱うメーカーおよび施工業者からなる法人 協力会員11社で構成されています。JIAの活動を有意義 なものにできるよう、いまだ収まらないコロナ禍でも相 互が協力しながら活動しています。

年間行事としては、月次定例会議以外に、夏季サロン セミナーや春季・秋季ゴルフ懇親会、年末には建物見学 会&忘年会を開催。また、JIA全国大会やフレンズカップ など、さまざまなイベントにも参加していましたが、2020 年初頭から国内でも新型コロナウイルス感染者が拡大す ると、対面式の会議やイベントを中止し、オンライン開 催へ変更したものの、慣れない環境に苦労したのを思い 出します。徐々にこれまでの企業活動に戻りつつありま すが、コロナ前とは違う、新たな活動が求められるよう になってきました。また、原材料高騰や物価高により新 たな変化も必要とされています。一方、コロナにより改 めて大切にすべきことに気づかされたこともありました。

対面式定例会議の再開

コロナ前はJIA館に集まって開催していた定例会議で したが、感染者数の状況をみながら感染予防対策を講じ たうえで、対面式の定例会議を再開しました。担当者 が代わった会社もあり、1年以上も画面越しのコミュニ ケーションだったので、対面したときは驚くほど新鮮で した。会議の進行や発言もスムーズで、参加者のぬくも りを感じる対面式が、活動していることを改めて実感さ せてくれました。感染拡大第7波の影響もあり、いった んは自粛となりましたが、現在はオンラインと併用した ハイブリッドで開催しています。



2022年3月M社会議室にて

企業向けセミナーの開催

Bグループ主催で2021年5月から2022年5月にわたり、 M社とA社でオンライン企業セミナーおよび、CPD認 定講習セミナーを開催しました。グループとして初めて の試みでしたが、希望する法人協力会員8社が2社1組 となり、合計で8回にわたり開催しました。延べ参加者 数で240名の方々がご参加くださり、正会員の皆様をは じめ、当時の代表幹事のご尽力ならびに各社の協力によ り、コロナ禍での活動としては大変に良い機会となりま した。参加者の反応がわかりづらい、配信トラブル発生 など、課題や反省はありますが、今後も継続して開催す ることになっています。

建物見学会ツアーの中止

毎年恒例だった1泊2日の夏季サロンセミナー。これ まで軽井沢や伊豆で開催し、建築工学系大学教授を講師 に迎え、支部内の正会員の皆様に参加いただき、翌日は ゴルフ懇親会で法人協力会員との交流を深めてきました。

3年ぶりとなった本年度は、1泊2日の「群馬~軽井沢 建物見学会ツアー」として、高崎駅に集合後、世界遺産 の「富岡製糸場及び旧富岡製糸場西置繭所」からスター トし、軽井沢の「軽井沢千住博美術館」や「石の教会内 村鑑三記念堂」の見学会ツアーを企画しました。宿泊先 はコテージを貸切り、BBQ、翌日は軽井沢で久しぶり のゴルフを予定していました。しかし、いよいよ支部内 の正会員の皆様へご案内しようとしていた矢先に、感染 拡大第7波となり、中止せざるを得ない状況となってし まいました。3年ぶりだっただけに非常に残念でしたが、 来年度の開催に期待したいと思います。



2022年5月A社様 CPD 認定講習セミナー開催

活動報告

交流委員会 Dグループ

福岡の今



交流委員会 D グループ 三越伊勢丹プロパ ティ・デザイン 市川匡亘

福岡へ

福岡へ転勤して2年半、赴任当初を思い起こすと、コ ロナの影響で最初の緊急事態宣言が発令され、着任が 2ヵ月遅れたことが思い出されます。また、転勤に際し、 たくさんの方々から福岡の状況や情報をいただき、大変 感謝しております。この場をお借りし御礼申し上げます。 当初は、得体のしれないコロナウイルスと、地方では感 染者が少なかったこともあり、東京から来た私は、先方 から聞かれなければ東京から転勤してきたことをあえて 話さず仕事をしていました。しかし、福岡の方々は、そ のような自分を暖かく迎え入れてくれました。また、転 勤を機に賛助会員の担当を交代することになりました。 転勤前や転勤直後は、リアル会議が主流でしたが、コロ ナの感染拡大で、当初は会議の中止→Web会議へと徐々 に移行し、所属していたDグループは、私に声を掛け てくださいました。その言葉に甘えて、会議に出席させ ていただく機会もあり、福岡にいる私が、関東甲信越支 部の活動をオンタイムで知ることができる状況が当たり 前となりました。今では、良い情報交換の場となってい ます。

ところで、福岡と言えば、皆さんは何を思い浮かべる でしょうか。食べ物なら博多ラーメン、もつ鍋、水炊き、 野球が好きな方はソフトバンクホークス、芸能人なら松 田聖子、藤井フミヤ、歴史が好きな方なら太宰府、黒田 官兵衛といったところでしょうか。

建設業界において、福岡市は今、非常に注目されてい る都市だということは聞いたことはありますでしょうか。

2つのビッグプロジェクト

福岡市は、東京や大阪ほど大都市ではありませんが、 地方都市では珍しく、人口が増え続けている都市です。 そのペースは予測より8年も早く進んでおり、2035(令 和17)年まで続くと予想されています。

このような福岡では、ご存じの方もいると思いますが、 今2つの大きな再開発が進められています。1つは、ア ジアの拠点都市を目指して行われる、天神を中心とした プロジェクト「天神ビッグバン」。もう1つは、都市機能 の向上を図ることを目的とし、博多を中心として行われ

るプロジェクト「博多コネクティッド」です。

福岡市は空港と街の中心地が近く、福岡空港と博多駅 は地下鉄で5分、天神駅は10分という位置にあります。 福岡を訪れる人たちには非常に便利ですが、それゆえに、 建物の高さは67mまでと決められ、高層の建物が建て られずにいました。しかし、2015年に「天神ビッグバン」 の計画が発表され、天神交差点を中心とした半径500m 以内で高さ制限が最大115mまで緩和され、容積率も UPすることになりました。また、指定された要件を満 たせば、さらにボーナスで容積率をプラスされることと なり、この制度を生かし、2026年12月までを目標に30 棟ものビルの建て替えが進められています。現在は、天 神駅周辺の大型ビルが次々と解体され、期限内の竣工に 向け、駅界隈は開発ラッシュとなっています。

もう1つの開発「博多コネクティッド」は、博多駅半 径500m以内で容積率などの規制緩和により、耐震性 の高い先進的なビルへ建て替える計画です。こちらも、 2028年12月までを目標に20棟のビルの建て替えが進め られています。

このように、福岡は建設ラッシュが続き、人々が集う 魅力的な都市です。そこで、もし福岡に来る機会があれ ば、仕事、プライベートに関係なく街の散策をお勧めし ます。新しいビルが数多く建設中ですが、歴史ある神社 や建築物などもたくさん見ることができます。

福岡へお越しの際は、ぜひお声をお掛けください。新 旧数多くの建築を見ることができる福岡を案内します。



「天神ビッグバン」開発が進む天神駅前

設計に入らない「目線の提案」



井上 宏

「目線の提案」の実践

ある意味少し変わった「はじまりかた」かも知れない。 設計コンペやプロポーザルから始まることはうちの会 社でも多い。あとは個別に計画の提案を求められて始ま ることもよくある。そんな中、最近私が実践しているの が「目線の提案」からのはじまりかた。

最初にクライアントから声が掛かる。それに対して建築計画の絵を一切描かずにまとめた提案で応える。その提案の内容が「目線」になっている。

建築計画の絵がない代わりに空間イメージや外観イメージがあるわけではない。建築ビジュアルは一切出さない。まだ全然建築に入り込まない。クライアントがやろうとしていることの「意味」に深く入り込んでいく。これから進めようとしていることがどのような意味を持っているのか、どのような課題を解決しているのか、どれぐらいの影響・効果をどんな領域に与えられるのか、など、そういったところを深掘りして提案をつくる。分かりやすく言うとクライアントが構想してきたこと(グランドコンセプトやプロジェクト方針など)の焼き直しをするような感じ。ただし相当な新しい要素を被せた焼き直し。それが「目線の提案」。

プレゼンテーションを受けたクライアントは、さまざまな反応をする。共感もあり、反論もあり、その強弱もいろいろである。

クライアントが建築を創ることになった背景を深く感じ、読み解きながらその相手の「目線」がどういう高さでどういう広さなのかを確認するのと同時に、それをストレッチして更に多くの「意味」を持たせたところから建築を創り始めたい、という欲求も重ねていたりする。せっかく建築を創るなら担うものや果たすことがたくさんあるほうがいい。その手掛かりと拡大装置が「目線の提案」になっている。

ソーシャルな「意味」を練り上げる

恵まれているのは、じっくりと考えることを大切にしているクライアントと始められる機会が多いこと。それとクライアント側の設計条件が全然整理できていないこと(若い頃から設計条件が決まっていないほうが嬉しく

なるタイプであった)。

「設計条件は完璧に整理したので不自由なく設計に打ち込んでください」とか「あとは期限内で設計するだけだから集中して良い建築を創ってください」というケースでは、もはや建築の持てる意味の幅が限定されてしまうと感じてしまう。

できるだけ建築計画に入らずに、クライアントに想い を巡らせてもらい、こちらからは建築単体にとどまらな い社会とか都市とシンクロさせたインプットを注入し続 ける。時に建築に担わせるべきプログラムやその組み合 わせ方も提案し対話する。将来どのようになっていくべ きか未来の地域の姿なども一緒に想像する。

可能な限り「意味」を考え抜いたあとに、やっと設計に入る。設計の楽しさも大きくなっている。設計条件も一緒に決めながらの設計も多い。最初はなるべく決めつけず寛容に進める。設計を進めていくと建築のあり方で紛糾することはよくある。「はじまりかた」のところで、拠り所となる想いと意味の部分をきちっと共感とともに練り上げて強いものにしておくことは、立ち返る原点をはっきりさせることになる。設計プロセスにおける紛糾も対話も更なる意味の強化になっていく。

建築だけの意味よりも、社会における意味、都市の中の意味、地域における意味、事業としての意味など、できるだけ多くの意味と合せて相乗効果を出すことに悪いことはない。よくテーマにする「賑わい」などはまさにそういうものだと思う。

2019年に参加していたJIA近未来研究委員会(『JIA MAGAZINE』366号参照)の活動の中で、建築家はもっと職能領域を拡げるべきであるというコミットメントを出した。特にこの「建築ウォームアップ」のテーマでもある「建築のはじまりかた」と大きく関係する「設計に入る前側の領域」においては、建築家が持てる職能を発揮できる場面が多くあるのではないか、もっと頼られる存在になるべきではないか、と考えてきた。社会やまちの課題を拾い上げて建築や都市を創造する職能の延長として解決していく。あの委員会活動から、少しずつやり始めたことの1つがこの「目線の提案」である。

山手線上を リニアプラザで線状につなぐ



水上勝之

1967年明治大学工学部建築学科卒業

なぜ建築学科だったのか?

高崎高校1年時に工事中の「群馬音楽センター」ロビー 壁画を制作する姿に感動、建築の道に進む決意。御茶ノ 水にある明治大学建築学科へ入学。そして「群馬音楽セ ンター」を設計したのがアントニン・レーモンドで、壁 画制作は別の仕事だということを知る。

日本建築学生会議の活動を知る

日本建築学生会議の主催で、群馬県の榛名湖畔での討論合宿に参加。吉阪隆正先生の話の後、磯崎新、原広司先生との徹夜での討論会に刺激されて、この会の執行部に参加することになる。

1965年に学生会議主催の「富士高原に立つ別荘コンペ」を開催。私が実行委員長として、審査委員を藝大の天野太郎、東大の生田勉、芝浦工大の石川洋美、明大の徳永勇雄、女性建築家の林雅子の5人の先生にお願いしてスタート。審査の中で、天野太郎、林雅子両先生のバトルがあり、金賞を決められず、5作品を入選として決定した。大学の枠を越えた交流があり、各大学の先生方も学生会議の活動には優先して参加していただいた。

1960年代と卒業設計テーマ

1960年代は未来都市の提案、菊竹清訓の搭状都市、丹下健三の東京計画1960、メタボリズム1960、磯崎新の都市プロジェクト、垂直動線を内包した搭乗コアが林立され、上空でブリッジ状に繋ぐプロジェクトに刺激されたが、やはり東京の街の風景は1964年の東京オリンピックを挟んで変身し始め、高速道路と車の風景に違和感があった。

「環状に走る山手線の上に遊歩道とサイクリングロードをつくって、1周してみたい。」が卒業設計のスタートだった。 学費値上げ反対闘争・卒業設計ボイコット同時スタート

1966年11月学費値上げ反対闘争突入。工学部では建築学科だけがストを支持し、卒業設計ボイコットを決議する。駿河台校舎に集結し、御茶ノ水駅前から駿河台下に向けデモ行進スタート。途中で、斜め前にいた学生が機動隊に向けて竹帚を投げた。私の隣の友人が投げたと勘違いされ、あっという間に機動隊に切り離され、血だらけになり彼はそのまま長野県に帰ってしまい、その後の消息は分からない。1967年2月バリケード解除、スト





リニアプラザ・イメージ模型写真

拠点駅1メーン模型与具

終結し授業再開。このような大学は早く出て、実務を始めたいと考え、卒業設計を再開する。

テーマ:山手線上をリニアプラザで線状に繋ぐ

都市機能の混乱は、より自由な無秩序を生んだ。この 無秩序の中に秩序を求める。そしてより組織的な空間体 系の中に開放的な人間の自由を求めよう。新宿・渋谷等 の求心的に膨張し、高密度化しつつある副都心地区、こ こに公衆のための線状の巨大なオープンスペースを導入 し、秩序ある発展を促す。

敷地を山手線上に求め、この上にリニアプラザを建設する。環状線は地下を通し、地表のレベルを開放する。細分化された緑地をこのリニアプラザと結ぶことにより巨大な1つの緑地帯として把握される。既存の繁華街とも有機的に結ばれる。これは余暇の街頭化に伴う都心におけるレクリエーションゾーンに位置するだろう。

発展の過程⇒新宿⇒代々木⇒原宿⇒渋谷⇒山手線一周 各駅を拠点としてリニアプラザで繋いでいく。リニア プラザの2層部分には店舗やオフィス、ギャラリー、美 術館等が内蔵されていく。最上階は遊歩道、サイクリン グロード、庭園テラスがあり、線状に連続するリニアプ ラザは周囲の緑地、運動場、ビジネス街等と結合されて いく。山手線沿線の建物はこの中に吸収して、両サイド の空地を増やし、太陽と緑の空間を構成していく。

卒業後と現在

レーモンド事務所時代に教会建築等を担当していた大村六郎建築事務所に勤務後、1970年に「私の設計七つ道具」を掲げて地盤看板のない東京で独立。ステンドグラス・家具等も制作し、自分の手作り感を大切にしている。2008年「群馬音楽センターの危機」を知り「群馬音楽センターを愛する会」を設立。昨年は開館60周年記念シンポジウムを開催し、記念誌を発刊した。

ひろば

学生の会 @joint 活動報告

新たな交流による可能性

一新しい人との出会いにより、 新たな企画が生まれました!-



学生の会 @ joint 小山満大

支部の垣根を越えた交流会を始めました!

今年の3月から、関東甲信越と近畿、九州の3つの支部の学生会員による交流会を始めました。月に1度オンラインで行っており、お互いの支部の活動を共有したり、何気ない話をしたりなど和やかな雰囲気で楽しく活動しています。

8月の交流会には、佐藤尚巳会長にもご参加いただきました。佐藤会長がラファエル・ヴィニオリ建築士事務所時代に担当された、東京国際フォーラムの設計の裏話やディテールについて教えていただきとても勉強になりました。

また、現在は3支部合同の青森合宿を企画しており、交流会の中でも議論を交わしています。合宿はもともと8月後半に実施する予定で計画していました。各支部の幹事を中心に東北支部青森地域会の方にオススメの建築や食事処について聞いたり、訪れる予定の建築物について各自1つずつ調べ、それをまとめたオリジナルのしおりを製作したりして準備を進めていました。しかし、青森を襲った大雨災害の影響などにより、夏合宿は来年の春に延期すること

になりました。

現在は、訪れる建築物についての調査をさらに深めたり、 新規の合宿参加者を募ったりして、春休みに向けて計画中 です。

今から期待の高まった春合宿の開催が楽しみです。



青森合宿のしおりの抜粋

「新歓!BBQイベント」を開催しました!

学生の会@jointは、今年4月にオンラインによる会員の 募集を行い、その際に多くの学生が入会してくれました。 しかしコロナ禍により、オンラインでのイベントが続く中 で、なかなか対面で会う機会がなかったため、9月10日に 東京都江東区のBBQ場で交流イベントを行い親睦を深め ました。

当日は、各自が手作りした自己紹介カードを持ち寄って 交換し合いながら、互いに会話を弾ませました。自己紹介 カードには、その人の人柄が文字だけでなく、画像やデザ インからも伝わりとても面白かったです。また私自身、学 年や学校も異なる初対面の人と話すのは面白く、とても勉 強にもなり良い経験になりました。

現在の会員数は30人を超え、さらに成長する@jointでさまざまなイベントが行えると思うと、今からワクワクします。その時には、多くの方のお力添えが必要になると思いますので、今後も@jointをよろしくお願いいたします。



参加者みんなで 記念撮影



自己紹介カード

ふるさと喜界島

コロナ禍による巣ごもり生活を強いられる中、テレビを観る機会が多くなりました。各TV局の番組制作にも大きな影響があったようで、特に海外ロケ番組は新企画の制作ができずに、ある時期から国内の特集番組が増え、田舎町や秘境を題材とした番組も多く見られるようになりました。そんな中で、我がふるさと喜界島を取り上げる番組も増え、知人より「観たよ」との便りをいただくこともあり、嬉しく思っています。

喜界島は南西諸島の奄美群島(鹿児島県)に属する島で、総人口6,360人、一周48.6km、面積56.82km²、最高地点でも海抜211mとほぼ平坦な小さな島です。約10万年間で珊瑚礁が何度か隆起を繰り返して誕生しました。隆起スピードは年平均約2mmで、現在も成長中でその速さは世界3本の指に入ります。

隆起珊瑚礁の特性を生かし、島には国内に数少ない地下ダムがあり、農業用水などにとても重宝されています。隆起サンゴのミネラル豊富な土壌で育つサトウキビからできる、黒糖焼酎やザラメ、黒糖、他にも白ゴマ(国内生産量1位)、マンゴー、喜界島メロンなど、特産品も揃えています。

また、島にはさまざまな蝶が生息し、特に金色の蛹から羽 化するオオゴマダラは「南の島の貴婦人」と呼ばれる保護蝶で、 とても人懐っこい蝶々です。



海底隆起珊瑚礁 (画像提供:喜界町役場)

そんな喜界島での少年時代は、馬乗り・騎馬戦・警泥など屋外で年齢問わずに大人数で、日が暮れるまで遊んだものです。 大人には内緒で魚や貝、たまに伊勢海老やタコなどを素潜りで捕り、サンゴ岩の洞穴で素焼きにして、顔中を煤で真っ黒にしながら楽しく美味しくみんなで食べては、たまに叱られたりもしました。

今後の目標として、コロナ禍の影響により3年連続で大会中 止となっている喜界島フルマラソンに1度はチャレンジして、 完走することを夢見てチバリます。

(交流委員会 Dグループ代表幹事 秋山隆典)

編集後記

来年の抱負

- ■スープ作家の有賀さんのお話を聞くことができたのは良い経験でした。少しずつ料理のレパートリーを増やしていきたいです。(佐久間)
- ■初春には初詣と、荻窪八幡宮、明治神宮、浅草寺に出掛けて家内安全、 社業、建築、設計界の繁栄を祈念いたします。(立石)
- ■数は少なくとも、より精度の高い仕事をしてゆきたい。今は雑務が多すぎ!こちらはなるべく減らしたい。もっと増えたりして…。(関本)
- ■イタリアでは地球温暖化でパスタの茹で時間短縮の記事、日本でも鍋が楽しめる日は秒読み?ゆっくり料理を楽しむ年にしたいです。(知見)
- ■来年こそ、生ハム復活の年にしたい!年6本が目標です。JIAの皆さん ご協力をお願いいたします。(中澤)
- ■忙しくなるとその物件以外が見えなくなってしまう、いろいろとバランス感覚を意識しながら物事に取り組んでいこうと思う。(望月)

- ■少しずつでも計画的に、ゆっくり着実に進めていくようなことを(全部でなくても)傍らに意識していきたいなと思います。(会田)
- ■変化の激しい世の中ですが、自分自身のアップデートも心掛けていきたいと思います。(竹内)
- ■ウォーミングアップ: 巣ごもりと不摂生が続きすっかり落ちた体力を 戻します。まずはゆるりと散歩から始めてみます。(市村)
- ■学生最後となる1年。今しかできないこと、やりたいことを心残りがないように活動し、充実した1年にしたいと思います。(長谷川)
- ■今以上に新しいことにどんどんトライしたい。忙しさはスピードで凌 駕し、休める時にしっかりと休む気合いを!(井筒)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会

関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 市村宏文 副委員長 : 中澤克秀

委員 :会田友朗・望月厚司・関本竜太・伊藤立平・竹内祐一・

佐久間達也・長谷川理奈

編集長 : 望月厚司

副編集長:関本竜太・佐久間達也

編集ワーキングメンバー:広報委員+吉田満・小倉直幸・井筒悠斗・

知見徹摩・立石博巳

編集・制作: 南風舎

Bulletin 294 2023 冬号

発行日: 令和4年12月15日

発行人:大西摩弥

発行所:公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒 150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館 Tel: 03-3408-8291代 Fax: 03-3408-8294

印刷:株式会社 ココラボ (旧社名:株式会社 協進印刷)

■JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

- ・(公社) 日本建築家協会 (JIA) http://www.jia.or.jp/
- ・JIA関東甲信越支部 https://www.jia-kanto.org/

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

©公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2022

古代より愛されてきたレンガ。

より強くより美しく、歴史に残るレンガ建築を目指します。



TB-WT 外断熱レンガ中空積み工法

レンガを使ってみたい、というお客様に 東京ブリック社は全力でお応えします。

東京ブリック社HPです。

■東京ブリック社 ※



■本社・デザインルーム 〒173-0004 東京都板橋区板橋2-40-3 TEL: 03-5248-1751 FAX: 03-5248-1753 E-mail: tokyobricksha@air.ocn.ne.jp

■さいたま事業所

〒338-0012 埼玉県さいたま市中央区大戸1-15-20 TEL: 048-762-9509 FAX: 048-762-9513

事業 ■国産レンガ・輸入レンガ 施工販売企画

内容 ■レンガ中空積み・レンガスクリーン・レンガルーバー工法開発 ■3Dデザイン・CAD施工図